

梵文和訳『阿毘達磨集論』(1)

阿毘達磨集論研究会

アサンガの手になる『阿毘達磨集論』(*Abhidharmasamuccaya*: AS)は、アビダルマの大乗的展開を知るうえでまず押さえておくべき論典である。同書は欧文での完訳(仏訳と英訳)が試みられているが、和文での完訳はいまだ果たされていない。また従来の欧文訳は、当時回収されていたわずかな梵文断片にチベット語訳および漢訳を合わせた、いわばつぎはぎのようなテキストにもとづくものであったが、近年、梵本全体の存在が確認された(Li 2013など)。これにより、同書の梵文原典の完訳を遂行するための基礎資料がようやく揃うことになる。本稿はかかる梵文原典の完訳を目指す試みの一部である。

同書は、「本事分(maula)」と「決択分(viniścaya)」との二篇に分かれるが、「本事分」はさらに「三法(tridharma=蘊界処)」・「摂(saṃgraha)」・「相応(yoga)」・「成就(samanvāgama)」との四章に分けられる。そのなか「三法」はさらに「幾何(kati)」・「因(kasmāt)」・「取(upādāna)」・「相(lakṣaṇa)」・「建立(vyavasthiti)」・「次第(krama)」・「義(artha)」・「喩(aupamyā)」・「広分別(bheda)」の八節に分けられる。本稿は、『阿毘達磨集論』とその『釈論』(-*bhāṣya*: ASBh)のうち、第一篇「本事分」第一章「三法」の中、「幾何」から「建立」の途中「色蘊建立」までの訳注研究であり、阿毘達磨集論研究会の研究成果である。

研究会では、代表者である那須良彦が下訳と注を準備し、加納和雄をはじめとする班員がそれを検討するという仕方で作業を進めた。また、附論に関しては田中裕成が担当した。*Abhidharmasamuccayavyākhyā* (ASVy)の写本などにもとづく梵文原典の制定は、李学竹の全面的な協力によりなし得た。研究会の班員は以下の通りである。

研究会代表者	那須良彦(社会福祉法人金剛樹心会理事長)	
研究会メンバー	加納和雄(高野山大学准教授)	李学竹(中国藏学研究中心宗教研究所研究員)
	吉田哲(龍谷大学講師)	松下俊英(大谷大学非常勤講師)
	早島慧(龍谷大学非常勤講師)	高務祐輝(京都大学大学院生)
	間中充(龍谷大学大学院研究生)	吹田隆徳(佛教大学大学院生)
	田中裕成(佛教大学大学院生)	

校訂と訳について

本稿で提示する、AS の梵文校訂テキスト（暫定版）は、同梵文写本第 1 葉、第 2 葉に相当する。このうち第 1 葉については、最近刊行された中国蔵学研究中心所蔵の影印の紙焼き（原本はポタラ宮蔵）にもとづく李の翻刻（Li 2013）による。そして第 2 葉は同写本に欠損しているため、安慧揉と伝えられる ASVy の梵文写本から AS 本文を取りだし（Li & Kano 2014）、そのテキストを提示した（中国蔵学研究中心に影印の紙焼きが所蔵され、原本はノルブリンカ蔵）。そして、ASBh はタティアの刊本に依り、読みに問題を含む箇所のみ、写本影印（Göttingen Xc14/23, 14/24）を確認して訂正を試みた。

本稿の校訂本において、異読や訂正は適宜注記したが、写本特有の綴り字や連声の標準化、アヴァグラハの追加、および分節の添削については煩を避けるため逐一報告しない。ASBh において太字で示した箇所は、AS の本文を指す。注は二種用いた。一つは、脚注で括弧を付した番号（例：⁽¹⁾ など）で表記した。もう一つは、附論の末注で括弧なしの番号（例：¹ など）で表記した。

近年、パウツダ・コーシャシリーズの『瑜伽行派の五位百法』が刊行された。その中には『阿毘達磨集論』における用語の定義も頻出し、特に注意深く厳選された訳語は非常に参考になる。

科段

総綱領偈	1.1.5.1 五蘊の設定
1 本事分	1.1.5.1.1 色蘊の設定
1.1 三法（蘊界処）	1.1.5.1.1.1 四大種
1.1.1 三法の数（幾何）	1.1.5.1.1.2 所造色
1.1.2 三法の数が限定される理由（因）	1.1.5.1.1.2.1 五根
1.1.3 三法が取蘊などと呼ばれる理由（取）	1.1.5.1.1.2.2 色境
1.1.4 三法の特徴（相）	1.1.5.1.1.2.3 声境
1.1.4.1 五蘊の特徴	1.1.5.1.1.2.4 香境
1.1.4.2 十八界の特徴	1.1.5.1.1.2.5 味境
1.1.4.3 十二処の特徴	1.1.5.1.1.2.6 触境
1.1.5 三法の設定（建立）	1.1.5.1.1.2.7 法処所撰色

総綱領偈

[AS] AS-Ms 1v1 (Li 2013: 243.5–11), ASVy-Ms 2v4–6 (Li 2015: 276.1–5), Hayashima 14. Cf. Pradhan 1.1–16.

[1v1] namaḥ sarvabuddhebhyaḥ saśrāvakaśaṃghebhyaḥ namo namaḥ.

kati kasmād upādānaṃ lakṣaṇaṃ tadvyavasthitiḥ,
kramārthaupamyabhedāś⁽¹⁾ ca saṃgrahādi catuṣṭayaṃ,
saṃgrahaḥ samprayogaś ca samanvāgama eva ca,
viniścayaś caturbhedah piṇḍoddānaṃ samuccaye,
satyadharmāptisāṃkathyaviniścayavibhedataḥ.

弟子衆（声聞僧伽）を伴う一切諸仏に重ねて礼拝⁽²⁾。

〔蘊界処という三法についての〕幾種、何故、取、特徴、〔および〕その〔三法の〕設定、順序、意味内容、喩例、分類の考察、〔以上が三法章〕。さらに撰に始まる〔三つの章をあわせて、都合〕四〔章となる〕。

〔三つの章とは〕撰、相応、成就（具有）である。〔以上、本事分。〕

決択〔分〕は、諦決択、法決択、得決択、論義決択に区別されるから、四〔章〕に分けられる。〔以上が〕集論における総綱領偈⁽³⁾。

[ASBh] ASBh-Ms 1v–2r (Tatia 1.2–13), ASVy-Ms 2v6–3r3 (Li 2015: 275.6–13), Hayashima 15

namo ratnatrayāya.⁽⁴⁾

kimartham idaṃ śāstram ārabdham. skandhādīn ārabhya kati kasmād ity evamādiṣu cintāsthāneṣu kauśalyakaraṇārtham. tathā hy anena kauśalyena dvividho ’nuśaṃso labhyate, manaskārānuśaṃsaḥ⁽⁵⁾ sām̐kathyaviniścayānuśaṃsaś ca. tatra (i) manaskārānuśaṃsaḥ śamathānukūlyād

⁽¹⁾ kramā-] ASVy-Ms, karmā- AS-Ms.

⁽²⁾ ASVy は冒頭に、安慧独自の手になるとみられる帰敬偈とその解説を掲げた後、「さて、まず弟子たちを安心させるために、論書の骨格が〔無著先生によって〕規程される」（tatrādītaḥ śāstraśarīraṃ vyavasthāpyate śiṣyāviśadārtham）と解説して本文に移る。安慧の帰敬偈と解説の校訂と訳注研究については別稿を準備している。

⁽³⁾ 総綱領偈（piṇḍoddāna）および AS 全体の章分けについては、吉元 [1978: 214–215] 参照。

⁽⁴⁾ ASBh-Ms の冒頭には、通例の写本の書き始めに倣い、siddham を意味するシンボルが記される。Tatia 校訂本はこのシンボルを om と翻字するが正確ではない。Tatia 校訂本は、冒頭に校訂者による挿入句として章題（lakṣaṇasamuccayo nāma prathamah samuccayah）を掲げる。

⁽⁵⁾ -ānuśaṃsaḥ] ASBh-Ms/ASVy-Ms, -ānuśaṃsaḥ (sic) Tatia.

vipaśyanāvṛddhyānukūlyāc ca veditavyaḥ. śamathānukūlyam punar eṣu sthāneṣu⁽⁶⁾ kṛta-
kauśalasya⁽⁷⁾ niḥsamdehatayā yatheṣṭam ālambana aikāgryayogena⁽⁸⁾ sukhaṃ cittasamadhānataḥ.
vipaśyanāvṛddhyānukūlyam⁽⁹⁾ bahubhiḥ prakārair jñeyaparīkṣayā⁽¹⁰⁾ prajñāprakarṣagamanataḥ.
(ii) sām̐kathyavinīścayānuśaṃsa eṣu sthāneṣu kuśalasya [2r] sarvapaśnavyākaraṇaśaktiyogād
vaiśāradyapratilambhato draṣṭavyaḥ.

三宝に礼拜。

【問】何のために、この論書〔の著述〕に着手するのか。【答】諸蘊など（つまり蘊界処という三法）に関して「幾種、何故」云々という考察課題（思択処）について巧みにさせるためである。それというのも、この巧みさによって二種の利益が獲られるからである。(1) 作意による利益と(2) 論義決択による利益である。そのうち、(1) 作意による利益は、①止（奢摩他）に随順することにもとづき、また②観（毘婆舍那）の増大に随順することにもとづく、と理解されるべきである。さらに、①止に随順することとは、これら〔考察〕課題について巧みになった者は、疑いを除去し、思いのままに、所縁に対して一点集中することによって、容易に心を入定させるからである。②観の増大に随順することとは、多くの方法によって、知の対象に対する考察をおこなうことを通して、智慧の卓越性に至らせるからである。(2) 論義決択による利益とは、これら〔考察〕課題について巧みな者は、あらゆる質問に答える能力を備えることにより、明晰性を獲るからである、と理解されるべきである。

1 本事分

1.1 三法（蘊界処）

1.1.1 三法の数（幾何）

【AS】AS-Ms 1v1-3 (Li 2013: 243.12-21), ASVy-Ms 3r3-6 (Li 2015: 276.14-277.5), Hayashima 14.7-13.
Cf. Pradhan 1.7-13.

kati skandhāḥ kati dhātavaḥ katy āya[1v2]tanāni. pañca skandhāḥ. rūpaskandho vedanāskandhaḥ
saṃjñāskandhaḥ saṃskāraskandho vijñānaskandhaḥ.⁽¹¹⁾ aṣṭādaśa dhātavaḥ. caḥṣṭurdhātū

⁽⁶⁾ Cf. ASVy-Ms: cintāsthāneṣu. (cintā om. ASVy-Tib.)

⁽⁷⁾ Cf. ASVy-Ms: kṛtakauśalyasya.

⁽⁸⁾ aikāgryayogena] ASBh-Ms?, ekāgrayogena ASVy-Ms, aikāgrayayogena Tatia.

⁽⁹⁾ -āvṛddhyānukūlyam] ASBh-Ms/ASVy-Ms, -āvṛddhayānukūlyam Tatia.

⁽¹⁰⁾ Cf. ASVy-Ms: -parīkṣaṇāt.

⁽¹¹⁾ Cf. ASVy-Ms: vijñānaskandhaś ca.

rūpadhātuś cakṣurvijñānadhātuḥ śrotradhātuḥ śabdadhātuḥ śrotravijñānadhātur ghrāṇadhātur gandhadhātur ghrāṇavijñānadhātur jihvādhātū rasadhātur jihvāvijñānadhātuḥ kāyadhātuḥ spraṣṭavyadhātuḥ kāyavi[1v3]jñānadhātur manodhātur dharmadhātur manovijñānadhātuḥ.⁽¹²⁾ dvādaśāyatanāni. cakṣurāyatanam rūpāyatanam śrotrāyatanam śabdāyatanam ghrāṇāyatanam gandhāyatanam jihvāyatanam rasāyatanam kāyāyatanam spraṣṭavyāyatanam manaāyatanam dharmāyatanam.⁽¹³⁾

【問】諸蘊はいくつあるのか。諸界はいくつあるのか。諸処はいくつあるのか。【答】諸蘊は五つである。〔すなわち、〕色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊である。諸界は十八である。〔すなわち、〕眼界・色界・眼識界、耳界・声界・耳識界、鼻界・香界・鼻識界、舌界・味界・舌識界・身界・触界・身識界、意界・法界・意識界である。諸処は十二である。〔すなわち〕眼処・色処、耳処・声処、鼻処・香処、舌処・味処、身処・触処、意処・法処である。

【ASBh】注釈せず。

1.1.2 三法の数が限定される理由（因）

【AS】AS-Ms 1v3-4 (Li 2013: 243.22-25), ASVy-Ms 3r6-3v2 (Li 2015: 277.6-10), Hayashima 16.1-4. Cf. Pradhan 1.14-2.1.

kasmāt pañcaiva skandhāḥ. pañcākārātmavastūdbhāvanatām upādāya. saparigra[1v4]hadehātmavastūdbhāvanatām upādāya. upabhogātmavastūdbhāvanatām upādāya. vyavahāratmavastūdbhāvanatām upādāya. dharmādharmābhisamskārātmavastūdbhāvanatām upādāya. tadāśrayātmavastūdbhāvanatām upādāya.⁽¹⁴⁾

【問】何に依って諸蘊は五つのみなのか。【答】五種の我事（自己存在にとっての基盤/自己存在なる基盤）を示すことに依ってである。〔すなわち、〕①執着対象（境）を伴った身体（根）という我事を示すこと（色蘊）、②受用という我事を示すこと（受蘊）、③言語表現という我事を示すこと（想蘊）、④法・非法に対する心の発動（造作）¹という我事を示すこと（行蘊）、⑤それらの所依としての我事を示すことに依ってである（識蘊）²。

【ASBh】ASBh-Ms 2r (Tatia 1.14-19), ASVy-Ms 3v2-5 (Li 2015: 277.11-16), Hayashima 17.1-7.

⁽¹²⁾ Cf. ASVy-Ms: mmanovijñānadhātuś ca.

⁽¹³⁾ Cf. ASVy-Ms: dharmāyatanañ ca.

⁽¹⁴⁾ Cf. ASVy-Ms: copādāya.

pañcākārātmavastūdbhāvanatām upādāyety atra caturākāram ātmano vastv ity ātmavastu, pañcamaṃ tv ātmalakṣaṇam eva vastv ity ātmavastv iti veditavyam. saparigrahadehagrahaṇena bāhyasyādhyātmikasya ca rūpaskandhasya grahaṇaṃ veditavyam. vedanādīnām upabhogādītvaṃ tallakṣaṇanirdeśe⁽¹⁵⁾ jñāpayiṣyate. tadāśrayātmasvavastu⁽¹⁶⁾ vijñānam, teṣāṃ saparigrahadehādīnām āśraya⁽¹⁷⁾ ātmalakṣaṇaṃ vastv ity arthaḥ. tathā hi loke⁽¹⁸⁾ prāyeṇa vijñāna ātmagrāhaḥ, śeṣeṣv ātmīyagrāha iti.

「五種の我事を示すことに依ってである」というこの中で³、〔前の〕⁴四種は、我にとつての事であるから「我事」といい、一方、第五のものは、事が他ならぬ我を特徴とする⁵から「我事」というのだと理解されるべきである⁶。「執着対象を伴った身体」という語を用いることによって、外的な〔色蘊〕と内的な色蘊とが含意されると理解されるべきである。受など⁷には受用などの性質があることは、それら〔受など〕の特徴（相）を解説する箇所において説示されるであろう。「それらの所依という我」そのものとしての「事」とは識⁸であつて、それら執着対象を伴った身体などにとつての所依であり、我を特徴とする事という意味である。それというのも、世間⁹において大概は、識¹⁰に対しては我執があり、残り〔の諸蘊〕に対しては我所執があるからである⁽¹⁹⁾。

【AS】AS-Ms 1v4 (Li 2013: 243.26–27), ASVy-Ms 3v5 (Li 2015: 277.17–18), Hayashima 16.4–5. Cf. Pradhan 2.1–2.

kasmād aṣṭādaśaiva dhātavaḥ. dehaparigrahābhyāṃ ṣaḍākārātītavartamānopabhogadhāraṇatām upādāya.

【問】何に依って、諸界はただ十八のみなのか。**【答】**身体と執着対象と¹¹により過去と現在の六種の受用を保持することに依ってである。

【ASBh】ASBh-Ms 2r–2v (Tatia 1.20–2.2), ASVy-Ms 3v5–4r1 (Li 2015: 277.19–23), Hayashima 17.8–14.

⁽¹⁵⁾ Cf. ASVy-Ms: upabhogādīttallakṣaṇa-.

⁽¹⁶⁾ 佐久間 [1996: 5] は、ASBh-Ms の読みである -ātmasvavastu を -ātmavastu に修正するが、この修正は必須ではない。すなわち、ASBh は当該の AS の ātmavastu の理解について、“pañcamaṃ tv ātmalakṣaṇam eva vastv ity ātmavastv” と解釈しているため、ātmasvavastu という表現はこの注釈に準じると考えられる。また、『雑集論』(T [31] 695a28) は「我自体事」と漢訳している点も ātmasvavastu を支持する。AS の tadāśrayātmasvavastu と一致しない点は、ASBh が語釈として sva の語を挿入したためであろう。現存の ASVy-Ms は ātmavastu としている点に関しても、その挿入語 sva を、合揉されている AS との一致を意識して削除したと考えることは可能であろう。本来存在しなかった sva が後から挿入されたと考えるよりは、本来 sva は存在したが後になって削除された場合もあると考える方が可能性は高いように思われる。

⁽¹⁷⁾ āśraya] ASVy-Ms, āśrayaṃ / ASBh-Ms, āśrayam Tatia.

⁽¹⁸⁾ Cf. ASVy-Ms: lokasya.

⁽¹⁹⁾ Cf. 『顕揚論』 T [31] 505c12–c22.

dehaparigrahābhyām iti cakṣurādīndriyaṣaṭkena⁽²⁰⁾ rūpādiviṣayaṣaṭkena ca. **ṣaḍākāro 'tīto vartamānaś copabhogo** vijñānaṣaṭkam, tasya **dhāraṇam** āśrayālabhanabhāvataḥ.⁽²¹⁾ ity evaṃ taddhāraṇatvena⁽²²⁾ [2v] dvādaśānām indriyaviṣayaṅgāṃ dhātutvam. vijñānānām punar upabhogalakṣaṇadhāraṇatvena dhātutvaṃ veditavyam. yathātītapratyutpannāś cakṣurādaya upabhogalakṣaṇadhārakā naivam anāgatāḥ.

「身体と執着対象とにより」とは、眼などの六根と色などの六境とにより、ということである¹²。「過去と現在の六種の受用」とは六識である。その〔六種の受用〕を「保持する」とは、〔六根と六境には順次、六識の〕所依と所縁の性質があるからである¹³。ゆえに、以上のように、その〔六種の受用〕を保持するので、十二の根と境は界である¹⁴。さらに識は、受用という特徴を保持するので界である、と理解されるべきである。過去と現在の眼などが、受用の特徴を保持するものであるのと同様には、未来〔の眼など〕は〔受用の特徴を保持するもの〕ではない⁽²³⁾。

[AS] AS-Ms 1v4–5 (Li 2013: 243.28–29), ASVy-Ms 4r1–2 (Li 2015: 277.24–25), Hayashima 16.5–8. Cf. Pradhan 2.2–4.

kasmād dvādaśaivāya[1v5]tanāni. dehaparigrahābhyām eva ṣaḍākārānāgatopabhogāyadvāratām upādāya.

【問】 何に依って、諸処はただ十二のみなのか。**【答】** ただ身体と執着対象との二つのみにより、未来の六種の受用がやってくる門（生門）となることに依ってである。

[ASBh] ASBh-Ms 2v (Tatia 2.3–4), ASVy-Ms 4r2–3 (Li 2015: 277.26–27), Hayashima 17.15–16.

āyadvāramātratvād⁽²⁴⁾ indriyārthamātragrahaṇena dvādaśaivāyatanāni vyavasthāpitāni, na tūpabhogalakṣaṇaṃ vijñānaṣaṭkam iti.

¹⁵ ただ〔識が〕やって来る門（生門）となるのみであるから、ただ根と境のみという語を用いることによって、十二処が設定されるのであって、受用を特徴とする六識が〔設定されるの〕¹⁶ではない。

⁽²⁰⁾ cakṣurādīndriya- | ASVy-Ms (=Tatia), cakṣurindriya- ASBh-Ms.

⁽²¹⁾ Cf. ASVy-Ms: -bhāvaḥ.

⁽²²⁾ Cf. ASVy-Ms: tāvad dhāraṇātvena.

⁽²³⁾ ASBh-Ms では、“yathātītapratyutpannāś cakṣurādaya upabhogalakṣaṇadhārakā naivam anāgatāḥ.” が、写本の上欄外に書き込まれている (Ms 2v)。また、ASBh-Tib. では対応箇所が欠損しており、ASVy-Tib. (D 119b3, P 146a5) では、対応箇所は確認されるが、naivam を欠く。『雑集論』(T [31] 695b5–6) には関連する議論は確認されるが、梵文とは逐語的に一致しない。文末注 15(謂如過... の注) を参照。

⁽²⁴⁾ Cf. ASVy-Ms: eṣām āyadvāramātratvād.

1.1.3 三法が取蘊などと呼ばれる理由（取）

【AS】AS-Ms 1v5-6 (Li 2013: 243.30-33), ASVy-Ms 4r3-5 (Li 2015: 277.28-278.1), Hayashima 20.1-4. Cf. Pradhan 2.5-8.

kasmād upādānaskandhā ity ucyante. upādānena yuktās tasmād upādānaskandhā ity ucyante. upādānaṃ katamat. yo 'tra cchandarāgaḥ. kena kāraṇena cchandarāga evopādānam. anāgatavartamānaskandhābhinirvṛtṭyaparitāgātām upādāya. anāgatābhilāṣato vartamā[1v6]nā-dhyavasānataś ca.

【問】なぜ、取蘊と呼ばれるのか。【答】取と結びついているゆえに、取蘊と呼ばれる。【問】取とは何か¹⁷。【答】こ〔の蘊〕に対する欲と貪である⁽²⁵⁾¹⁸。【問】なぜ、欲と貪だけが取なのか¹⁹。【答】未来と現在の蘊を生起させ、かつ捨てないことに依ってである。未来〔の蘊〕に対して希求する〔からであり〕、現在〔の蘊〕に執着するからである²⁰。

【ASBh】ASBh-Ms 2v (Tatia 2.5-8), ASVy-Ms 4r5-6 (Li 2015: 278.2-5), Hayashima 21.1-6.

upādānaṃ chando rāgaś ca. tatra cchando 'bhilāṣaḥ.⁽²⁶⁾ rāgo 'dhyavasānam. chandenānāgatam ātmabhāvam abhilāṣamukhenopādatte. yenānāgatān skandhān abhinirvartayati.⁽²⁷⁾ rāgena vartamānam ātmabhāvam adhyavasānamukhenopādatte. yena vartamānān skandhān⁽²⁸⁾ na parityajati. tasmād etad eva dvayam upādānam ity ucyate.

取とは、欲と貪である。そのうち、欲とは希求である。貪とは執着である。欲によって、〔つまり〕希求によって、来世の身体を取得する。それによって来世の諸蘊を出現させる。貪によって、〔つまり〕執着によって、現在の身体を取得する。それによって現在の諸蘊を捨てない。それゆえに、まさのその二つが取と呼ばれる。

⁽²⁵⁾ Cf. AKBh-III 140.16-17:

teṣāṃ upādānaṃ teṣu yaś chandarāgaḥ. evaṃ hi bhagavatā sarvatrākyātām “upādānaṃ katamat. yo 'tra cchandarāga” iti.

それら〔欲等 (kāmadī)〕の取は、それらに対する欲と貪なるものである。というのも、世尊が一切〔の経〕の中で次のように説かれたからである。「取とは何か。これに対する欲と貪なるものである」と。

なお、当該箇所は、『雑阿含』第 240 経「取経」(T [2] 58a1-6)、SN XXXV, 110 ([IV] 89) との関連が指摘されている。小谷・本庄 [2007: 182, note 7]、本庄 [2014: 391 (no. 3053); 687 (no. 5025); 809 (no. 7006)] 参照。

⁽²⁶⁾ ASVy-Ms では āṣanaḥ とあり、Li [2015: 278.2] は 'bhilāṣanaḥ と訂正する。

⁽²⁷⁾ Cf. ASVy-Ms: nirvartayati.

⁽²⁸⁾ Cf. ASVy-Ms: varttamānaskandhān.

【AS】 AS-Ms 1v6 (Li 2013: 243.34–35), ASVy-Ms 4r6–4v1 (Li 2015: 278.6–7), Hayashima 20.5. Cf. Pradhan 2.9.

kena kāraṇena dhātava āyatanāni ca sopādānā dharmā⁽²⁹⁾ ity ucyante. tatra skandhavan nirdeśaḥ.

【問】なぜ、諸々の界と諸々の処が取を伴っている諸法と呼ばれるのか。【答】それについての説明は、蘊と同じである。

【ASBh】 ASBh-Ms 2v (Tatia 2.8–9), ASVy-Ms 4v1 (Li 2015: 278.8), Hayashima 21.6–7.

tatra skandhavan nirdeśa itī,⁽³⁰⁾ upādānena yuktās tasmāt sopādānadharmā itī vedītavayam.

「それについての説明は、蘊と同じである」とは、「取と結びついているゆえに²¹、〔界と処も〕取を伴っている諸法」であると理解されるべきである。

1.1.4 三法の特徴（相）

1.1.4.1 五蘊の特徴

【AS】 AS-Ms 1v6–7 (Li 2013: 244.1–4), ASVy-Ms 4v1–3 (Li 2015: 278.9–12), Hayashima 20.6–9. Cf. Pradhan 2.10–12.

kiṃlakṣaṇo rūpaskandhaḥ. rūpaṇālakṣaṇaḥ. dvividhayā rūpaṇayā. sparśarūpaṇayā deśa-nirūpaṇayā⁽³¹⁾ ca. sparśarūpaṇā⁽³²⁾ katamā. pāṇisaṃsparśena⁽³³⁾ spr̥ṣṭo rūpyate. loṣṭasaṃsparśena daṇḍasaṃsparśena śastrasaṃsparśena [1v7] śītenoṣṇena jighatsayā pipāsayā daṃśamaśakavātā-tapasarīsprasaṃsparśaiḥ spr̥ṣṭo rūpyate.

【問】色蘊はいかなる特徴（相）を持つのか²²。【答】rūpaṇā を特徴とする²³。rūpaṇā には二種ある²⁴。〔すなわち、〕触による変壞（rūpaṇā）⁽³⁴⁾ と、場所を表示すること（nirūpaṇā）であ

⁽²⁹⁾ Cf. ASVy-Ms: sopādānadharmā.

⁽³⁰⁾ ASVy-Ms omits “tatra skandhavan nirdeśa itī.”

⁽³¹⁾ Cf. ASVy-Ms: deśarūpaṇayā.

⁽³²⁾ Cf. ASVy-Ms: sparśirūpaṇā.

⁽³³⁾ Cf. ASVy-Ms: pāṇisparśenāpi.

⁽³⁴⁾ Cf. ŚrBh₁ (YBh) 240.3–9:

dharmatāyuktiḥ katamā. kena kāraṇena tathābhūtā ete skandhāḥ, ... itī. tathā kena kāraṇena rūpaṇālakṣaṇam rūpam, anubhavanalakṣaṇā vedanā, saṃjānanālakṣaṇā saṃjñā, abhisamskaraṇalakṣaṇāḥ saṃskārāḥ, vijānanālakṣaṇam vijñānam itī. prakṛtir eṣāṃ dharmāṇāṃ iyam, svabhāva eṣa idr̥śaḥ, dharmataiṣā.

法爾道理とは何か。「何故これらの諸蘊はそのように存在し、...」といい、同様に「何故色は変壞することを特徴とし、受は感受することを特徴とし、想は表象作用を特徴とし、諸行は〔心の〕発動（造作）を特徴とし、

る⁽³⁵⁾。【問】触による変壞とは何か²⁵。【答】手の接触によって触れられたものが、変壞する²⁶。石の接触、杖〔の接触〕、刀の接触、寒さと熱さ〔の接触〕、食欲と喉の渇き〔の接触〕、アブ・蚊・風病・熱病・ヘビの接触によって、〔それぞれ〕触れられたものが〔各々〕変壞する⁽³⁶⁾。

【ASBh】 ASBh-Ms 2v (Tatia 2.10), ASVy-Ms 4v3-4 (Li 2015: 278.13), Hayashima 21.8.

sparsēna rūpaṇā⁽³⁷⁾ anyathābhāvo⁽³⁸⁾ veditavyaḥ.

識は識別作用を特徴とするのか」という、こうしたことはこれらの諸法の本質であり、このようなものは〔諸法の〕これなる自性であり、こうしたことは法爾なのである。

VinSg (YBh) D 37b5-6, P 40a2-4, T [30] 593b10-12:

de la gzugs gañ ze na / de ni nram pa bcu gcig tu rig par bya ste / mig la sogs pa reg bya'i mthar thug pa'i bar gyi
skye mched bcu dañ / chos kyi skye mched du gtogs pa'i gzugs so // de yañ mdo bsdu na 'byuñ ba dañ 'byuñ ba
las gyur pa ste / thams cad kyañ gzugs su ruñ ba'i mtshan ñid yin no //

問何等是色自性。答略有十一。謂眼等十色處及法處所攝色。又總有二。謂四大種及所造色。如是一切皆變礙相。

そ〔のウッダーナ〕の中で〔自性について〕、色とは何か。それは11種であると知るべし。〔すなわち〕眼を始めとし所触に終わる十處と法處所攝色とである。それはまともれば大種と大種所造とであり、全て変壞を特徴とする。

⁽³⁵⁾ 当該箇所は rūpaṇā の語源解釈が変壞 (rūpaṇā, √ rup: to suffer, violent) と表示 (nirūpaṇā, √ rūp: to form, figure, represent) の二通りに解釈出来ることを説明している。松島 [2007]、浪花 [2008: 109 note 5]、山口 [1959: 68 note 4] 参照。

また、nirūpaṇā については、以下を参照。

ManoBh (YBh) 70:

tatra tatra deśe nirūpyate tatra tatra deśe rūpyati rohati ceti tasmād rūpam.

それぞれの場所で表示され、それぞれの場所では変壞し増長するので、それ故に色である。

VinSg (YBh) D 76b4-5, P 80a5-6, T [30] 608c20-23:

ci'i phyir gzugs la gzugs zes bya ze na / smras pa / yul de dañ der skye ba'i don dañ / gzugs su ruñ ba'i don gyis
so // gzugs su ruñ ba'i don kyañ mam pa gñis te / lag pa la sogs pa'i 'dus te reg pas gnod pa byar ruñ ba'i don dañ
yul sna tshogs su byed pa'i don to //

問何縁色蘊説名爲色。答於彼彼方所種植増長義及變礙義故名爲色。此變礙義復有二種。一手等所觸便變壞義。二方處差別種種相義。

何故「色 (rūpa)」を色 (rūpa) と呼ぶのか。答える。それぞれの場所で増長する (rohati) という意味と、rūpaṇā という意味によってである。rūpaṇā の意味も二種あって、手などの接触により変壞するという意味と、場所をおもいえがく (sna tshogs su byed pa, *citrikāra) という意味である。

その他、『瑜伽論』 T [30] 660c22-661a2 参照。

⁽³⁶⁾ Cf. 『雜阿含』第46經 (T [2] 11b27-29):

若可闕可分。是名色受陰。指所闕。若手若石若杖若刀若冷若暖。若渴若飢。若蚊虻諸毒虫風雨觸。是名觸闕。是故闕是色受陰。

SN XXII, 79 (III) 86:

kiñca bhikkhave rūpaṇṇ vadeta. ruppattī kho bhikkhave tasmā rūpan ti vuccati. kena ruppatti. sītena pi ruppatti
uñhena pi ruppatti jigghacchāya pi ruppatti pipāsāya pi ruppatti ḍaṃsamakasavātātapasirisapasamphassena pi
ruppatti. ruppattī kho bhikkhave tasmā rūpan ti vuccāti (Sic).

Cf. 本庄 [2014: 84-87 (no. 1014)].

⁽³⁷⁾ rūpaṇā] ASVy-Ms (=佐久間 [1996: 5]), rūpaṇā ASBh-Ms, rūpaṇām Tatia. Cf. ASVy-Ms: saṃsparsēna rūpaṇā sparśarūpaṇā.

⁽³⁸⁾ Cf. ASVy-Ms: anyathābhāvo.

「触による変壞」とは、³¹別様になることであると理解されるべきである³²。

【AS】 AS-Ms 1v7 (Li 2013: 244.4–6), ASVy-Ms 4v4–5 (Li 2015: 278.14–15), Hayashima 20.9–11. Cf. Pradhan 2.12–14.

deśanirūpaṇā⁽³⁹⁾ katamā. yā deśa idaṃ cedañ ca rūpam evaṃ caivañ ca rūpam iti samāhitena manasāsamāhitena vā tarkasaṃprayuktena citrīkārātā.

【問】場所を表示することとは何か²⁷。【答】場所において、「かくかくの色は²⁸、しかじかの²⁹色である」と〔思いながら〕、入定している意によって、あるいは入定することなく尋と相応している³⁰〔意〕によって、おもいえがくことである⁽⁴⁰⁾。

【ASBh】 ASBh-Ms 2v–3r (Tatia 2.10–12), ASVy-Ms 4v5–6 (Li 2015: 278.16–18), Hayashima 21.8–10.

yā deśe ity abhimukhapradeśe. idaṃ cedaṃ cety asthiśaṃkalādikaṃ⁽⁴¹⁾ [3r] jñeyavastusabhāgāṃ pratibimbam.⁽⁴²⁾ evaṃ caivaṃ ceti varṇasaṃsthānabhedaiḥ.⁽⁴³⁾ citrīkārātetī tathāsaṃjñānam.⁽⁴⁴⁾

「場所において」とは、現前の場所においてである。「かくかくは³³」とは骨鎖などといった認識対象と類似した影像である。「しかじかである³⁴」とは、いろ・かたちの異なりをもって、である。「おもいえがくこと」とは、そのように表象（イメージ）することである。

【AS】 AS-Ms 1v7 (Li 2013: 244.7), ASVy-Ms 4v6 (Li 2015: 278.19–20, Li & Kano 2014: 55.13–14), Hayashima 22.1–3. Cf. Pradhan 2.14–15.

kiṃlakṣaṇā vedanā. anubhavalakṣaṇā.⁽⁴⁵⁾ yadrūpeṇānubhavena⁽⁴⁶⁾ śubhāśubhānāṃ karmaṇāṃ phalavipākāṃ pratyānubhavatī.⁽⁴⁷⁾

【問】受はいかなる特徴を持つのか³⁵。【答】感受という特徴を持つ⁽⁴⁸⁾³⁶。そのようなあり方を

⁽³⁹⁾ Cf. ASVy-Ms: deśarūpaṇā.

⁽⁴⁰⁾ Cf. 『顯揚論』 T [31] 503b4–13.

⁽⁴¹⁾ Cf. ASVy-Ms: asthiśaṃkalikādikaṃ.

⁽⁴²⁾ Cf. ASVy-Ms: -sabhāgapratibimbam.

⁽⁴³⁾ Cf. ASVy-Ms: vastusaṃsthāna-

⁽⁴⁴⁾ -saṃjñānam] ASVy-Ms, -saṃjñānaḥ ASBh-Ms, -saṃjñā Tatia.

⁽⁴⁵⁾ anubhavalakṣaṇā] ASVy-Ms AS-Tib. (D 45b1, P 52a6: myoñ ba'i mtshan nyid de) 『集論』 (T [31] 663b4: 領納相是受相), om. AS-Ms.

⁽⁴⁶⁾ yad-] ASVy-Ms, yā AS-Ms.

⁽⁴⁷⁾ phalavipākāṃ pratyānubhavatī] ASVy-Ms, phalavipākāṃ +++(+ は判読不能の文字) AS-Ms.

⁽⁴⁸⁾ Cf. SavitBh (YBh) 207.1:

vedanāskandhaḥ katamaḥ / anubhavajātiḥ sarvā /

した感受によって、浄・不浄の諸業の異熟果³⁷を享受するのである⁽⁴⁹⁾。

【ASBh】 ASBh-Ms 3r (Tatia 2.13–16), ASVy-Ms 4v6–5r2 (Li 2015: 278.21–279.1), Hayashima 23.1–5.
śubhānām karmanām sukho ’nubhavaḥ phalavipākaḥ. aśubhānām duḥkhaḥ. ubhayeśām
aduḥkhāsukhaḥ. tathā hi śubhānām aśubhānām vā vipāka ālayavijñānaṃ nityam upekṣayaiva
saṃprayuktaṃ bhavati.⁽⁵⁰⁾ **saiva cātrophekṣā vipākaḥ. sukhaduḥkhayos tu vipākajatvād**
vipākopacāraḥ.

諸々の浄業の異熟果 (phalavipāka) とは、楽なる感受である。諸々の不浄〔業〕の〔異熟果〕とは苦なる〔感受〕である³⁸。双方の〔つまり、浄不浄業の異熟果〕とは、不苦不楽なる〔感受〕である³⁹。つまり、浄あるいは不浄〔業〕にとつての異熟〔果〕たる阿頼耶識は、常に捨のみと相応しており、そして、この場合 (阿頼耶識を想定した場合)、その捨こそが〔本来は〕異熟⁴⁰であるけれども、楽と苦は⁴¹異熟より生じたものであるから、〔その果たる楽と苦もまた〕比喩的に「異熟」と表現される。

【AS】 AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 5r2–3 (Li 2015: 279.2–3, Li & Kano 2014: 55.15–16), Hayashima 22.4–6.
Cf. Pradhan 2.16–17.

kiṃlakṣaṇā saṃjñā. saṃjānanālakṣaṇā. yadrūpeṇa nimittagraheṇa citrīkāreṇa yathādrṣṭaśrutamatavijñā[5r3]tān arthān anuvyavaharati.

【問】 想はいかなる特徴を持つのか⁴²。【答】 表象作用という特徴を持つ⁽⁵¹⁾⁴³。そのようなあり

受蘊とは何か。あらゆる感受の類である。

VinSg (YBh) D 37b6–38a6, P 40a4–b3, T [30] 593b13–27:

tshor ba gañ ze na / de ni rnam pa drug tu blta bar bya ba ste ... // de yañ rnam pa gsum dañ rnam pa gñis te / lus kyi dañ sems kyi'o // ... de lta bas na tshor ba ni mdor bsdu na / lus kyi dañ sems kyi yin la thams cad kyañ myoñ ba'i mtshan ñid yin no //

問何等是受自性。答略有六種。… 此復二種。若色爲依名身受、無色爲依名心受。… 故總說二。謂身心受。又一切受皆領納相。

受とは何か。それは6種であると見るべきであって…。それはまた、3種や2種であって身の〔受〕と心の〔受〕とである。… それゆえ、受はまとめれば身の〔受〕と心の〔受〕とであり、全て感受を特徴とする。

⁽⁴⁹⁾ yadrūpeṇānubhavena の理解は難解であるが、ここでは「声聞地」(ŚrBh₂ 142.4–5) の類似する用例を踏まえて直訳的にこのように訳した。yad=vedanā とするこの場合、anubhava=vedanārūpa となるため、直前の vedanā=anubhavalakṣaṇā と循環するように思われる。もしくは別の理解の可能性として、yadを「なんらかの」という意味で理解すれば、「ある特定の形をもった感受によって」と訳し得るのかも知れない。その可能性については、以下の saṃjñā, saṃskāra, vijñāna でも同様である。

⁽⁵⁰⁾ Cf. ASVy-Ms: bhavañti.

⁽⁵¹⁾ Cf. SavitBh (YBh) 207.2:

saṃjñāskandhaḥ katamaḥ. saṃjānanājātiḥ sarvā.

想蘊とは何か。あらゆる表象作用の類である。

方をした、特徴(像)の把握によって⁴⁴、〔つまり〕おもいえがくことによって、見られ、聞かれ、考えられ、識別された通りの対象を言語表現するのである。

【ASBh】ASBh-Ms 3r (Tatia 2.16–18), ASVy-Ms 5r3–4 (Li 2015: 279.4–6), Hayashima 23.5–8.

dr̥ṣṭaśrutamatavijñātān⁽⁵²⁾ **arthān** iti, **dr̥ṣṭam** yac⁽⁵³⁾ cakṣuṣānubhūtam, **śrutam** yac chrotreṇānubhūtam, **matam** yat svayam abhyūhitam evaṃ caivaṃ ca bhavitavyam iti, **vijñātam** yat pratyātmam anubhūtam iti.⁽⁵⁴⁾ **vyavaharātīty** abhilāpaiḥ prāpayātīty⁽⁵⁵⁾ arthaḥ.

「見られ、聞かれ、考えられ、識別された対象」という中で、「見られた〔対象〕」とは、眼によって感受された〔対象〕⁴⁵であり、「聞かれた〔対象〕」とは、耳によって感受された〔対象〕⁴⁶であり、「考えられた〔対象〕」とは、「かくかくしかじかであるはずだ」と自ら推察された〔対象〕⁴⁷であり、「識別された〔対象〕」とは、各々各自感受された〔対象〕である。「言語表現する」とは、ことばをもって理解させるという意味である⁽⁵⁶⁾。

【AS】AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 5r4–5 (Li 2015: 279.7–9, Li & Kano 2014: 55.17–19), Hayashima 22.7–8. Cf. Pradhan 2.18–19.

kiṃlakṣaṇāḥ saṃskārāḥ. abhisamkaraṇalakṣaṇāḥ. yadrūpeṇa cittābhisamkāreṇa⁽⁵⁷⁾ kuśa[5r5]le 'pi cittam prerayati. akuśale 'py avyākṛte 'pi cittam prerayati nānāvasthāsu ca.

【問】諸行はいかなる特徴を持つのか⁴⁸。【答】〔心の〕発動(造作)という特徴を持つ⁽⁵⁸⁾⁴⁹。そ

VinSg (YBh) D 38a6–b2, P 40b3–7, T [30] 593b27–c6:

'du śes gaṅ ze na / de yaṅ sṅa ma bzin du rnam pa drug go // ... mtshan ma med pa 'i 'du śes ni srid pa 'i rtse mo 'i 'du śes gaṅ yin pa daṅ 'jig rten las 'das pa slob pa daṅ / mi slob pa 'i thams cad de thams cad kyaṅ kun du śes par byed pa 'i mtshan nīd yin no //

問何等是想自性。答此亦六種如前應知。... 無相想者謂有頂想及一切出世間學無學想。又一切想皆等了相。

想とは何か。それは前〔に示した受〕と同様に6種である。... 特徴を持たない想とは、有頂の想なるものと、全ての出世間の学と無学の〔想〕であり、全て表象作用を特徴とする。

⁽⁵²⁾ dr̥ṣṭaśrutamatavijñātān] ASBh-Ms (=佐久間 [1996: 5]) ASVy-Ms, dr̥ṣṭaśrutamatavijñātān Tatia.

⁽⁵³⁾ Cf. ASVy-Ms: yaś.

⁽⁵⁴⁾ ASVy-Ms omits iti.

⁽⁵⁵⁾ prāpayātīty] ASVy-Ms (=Tatia), prāpatīty ASBh-Ms.

⁽⁵⁶⁾ Cf. 『顯揚論』 T [31] 572b23–28.

⁽⁵⁷⁾ cittā-] em., cintā- ASVy-Ms.

⁽⁵⁸⁾ Cf. SavitBh (YBh) 207.2–3:

saṃskāraskandhaḥ katamaḥ. cittābhisamkāramanaskarmajātiḥ sarvā.¹⁾

1) チベット語訳 (D 106a4, P 121a4–5: thams cad kyaṅ sems mñon par 'du byed pa yid kyi las kyi rnam pa yin no)、および漢訳 (T [30] 323a10–11: 行蘊云何。謂一切心所造作意業種類。)に基づいて sarvā を補う。

行蘊とは何か。あらゆる、心の発動(造作)による意業の類である。

VinSg (YBh) D38b2–4, P 40b7–41a1, T [30] 593c7–12:

のようなあり方をした⁵⁰心の発動によって、善なるものに対して心を動かし、さらに不善なるものに対しても、また無記なるものに対しても、そして様々な段階に対しても、心を動かすのである⁵¹。

【ASBh】 ASBh-Ms 3r (Tatia 2.19), ASVy-Ms 5r5 (Li 2015: 279.10), Hayashima 23.9.

nānāvasthāsu ceti sukhaduḥkhādyāsu.⁽⁵⁹⁾

「そして様々な段階に対して」とは、苦⁵²・楽などの〔段階〕に対してである⁵³。

【AS】 AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 5r5–6 (Li 2015: 279.11–12, Li & Kano 2014: 55.20–21), Hayashima 22.8–10. Cf. Pradhan 2.19–3.2.

kiṃlakṣaṇaṃ vijñānam. vijñānāla[5r6]kṣaṇam. yadrūpayā vijñānaya rūpāṇy api vijñāti śabdān gandhān rasān spraṣṭavyān dharmān api vijñāti.

【問】 識はいかなる特徴を持つのか⁵⁴。【答】 識別作用という特徴を持つ⁽⁶⁰⁾⁵⁵。そのようなあり方をした識別作用によって、諸々の色を識別する。声・香・味・所触・諸法⁵⁶をも識別する。

【ASBh】 注釈せず。

1.1.4.2 十八界の特徴

【AS】 AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 5r6–5v1 (Li 2015: 279.13–14, Li & Kano 2014: 55.22–23), Hayashima 24.1–2. Cf. Pradhan 3.3–4.

'du byed rnams gañ že na / de dag kyañ sña ma kho na bzin du rnam pa drug go // ... 'du byed rnams ni mdor bsdu na dge ba dañ mi dge ba dañ luñ du ma bstan pa dag ste thams cad kyañ mñon par 'du byed pa'i mtshan ñid yin no //

問、何等是行自性。答、此亦六種、如前應知。... 又此行相略有三種。一者善行、二不善行、三無記行。又一切行皆造作相。

諸行とは何か。それは実に前〔に示した受〕と同様に6種である。... 諸行はまとめれば、善と不善と無記であり、全て発動を特徴とする。

⁽⁵⁹⁾ Cf. ASVy-Ms: sukhaduḥkhādyavasthāsu.

⁽⁶⁰⁾ Cf. SavitBh (YBh) 207.3–4:

vijñānaskandhah katamaḥ. vijñānājātiḥ sarvā.

識蘊とは何か。あらゆる識別作用の類である。

cakṣurdhātulakṣaṇam katamat. yena cakṣuṣā rūpāṇi dṛṣṭavān paśyati ca ya[5v1]c⁽⁶¹⁾ ca tadbījam upacitam vaipākyam ālayavijñānam tac cakṣurdhātulakṣaṇam.⁽⁶²⁾

【問】眼界の特徴は何か。【答】諸々の色をかつて見た、また〔現に〕見る眼という作具 (yena)⁵⁷、および積集したその種子としての〔阿頼耶識および〕異熟の阿頼耶識、それが眼界の特徴である。

【ASBh】ASBh-Ms 3r-3v (Tatia 2.20-24), ASVy-Ms 5v1-2 (Li 2015: 279.15-18), Hayashima 25.1-5.

yena cakṣuṣā rūpāṇi dṛṣṭavān ity atītavijñānopabhogadhāra katvena dhātutvaṃ⁽⁶³⁾ darśayati. paśyatīti [3v] vartamānavijñānopabhogadhāra katvena. yac ca tasya cakṣuṣo bījam upacitam ālayavijñānam yata āyatyāṃ cakṣur nirvartīsyate,⁽⁶⁴⁾ vaipākyam ca yato nirvṛttam, tad api dvividham bījam⁽⁶⁵⁾ cakṣurdhātur ity ucyate, cakṣuṣo hetutvāt.

「諸々の色をかつて見た眼という作具⁵⁸」⁵⁹とは、過去の識という受用を保持するもの (dhāraka) であるから界 (dhātu) であるということを示している。「〔現に〕見る」とは、現在の識の受用を保持するものであるから〔界であるということを示している〕(界という語は保持する手段を意味する)⁶⁰。「積集したその眼の種子としての阿頼耶識」とは⁶¹、未来において眼の生起をもたらすものである。「異熟の〔阿頼耶識〕」とは⁶²、すでに〔眼の〕生起をもたらしたものである。その二種の種子もまた眼界と呼ばれる。〔なぜなら二種の種子は〕眼の原因だからである (界という語は原因を意味する)。

【AS】AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 5v3 (Li 2015: 279.19-20, Li & Kano 2014: 55.24), Hayashima 24.2-4. Cf. Pradhan 3.4-5.

[5v3] yathā cakṣurdhātulakṣaṇam evaṃ śrotraḥrāṇajihvākāyamanodhātulakṣaṇam.

耳・鼻・舌・身・意界の特徴⁶³も、眼界の特徴⁶⁴と同様である。

【ASBh】注釈せず。

⁽⁶¹⁾ yac] em., yaś ASVy-Ms.

⁽⁶²⁾ -dhātu-] em., -dhāti- ASVy-Ms.

⁽⁶³⁾ Cf. ASVy-Ms: dhātu.

⁽⁶⁴⁾ Cf. ASVy-Ms: nnivartīsyate.

⁽⁶⁵⁾ ASVy-Ms omits bījam.

【AS】AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 5v3-4 (Li 2015: 279.20-21, Li & Kano 2014: 55.25-26), Hayashima 24.4-5. Cf. Pradhan 3.5-6.

rūpadhātulakṣaṇaṃ katamat. yāni cakṣuṣā rūpāṇi dṛṣṭāni dṛśyante ca yac ca⁽⁶⁶⁾ cakṣurdhātos tatrādhipa[5v4]tyaṃ tad rūpadhātulakṣaṇam.

【問】色界の特徴は何か。【答】かつて眼で⁶⁵見られた諸々の色⁶⁶、現に見られている〔諸々の色〕、そして眼界のもつそ〔の色〕に対する支配力（増上力）、以上が色界の特徴である。

【ASBh】ASBh-Ms 3v (Tatia 2.24), ASVy-Ms 5v4 (Li 2015: 279.22), Hayashima 25.5-6.

yac cakṣurdhāto rupa ādhipatyam⁽⁶⁷⁾ iti rūpīndriyādhipatyena⁽⁶⁸⁾ bāhyaviṣayanirvartanāt.

「眼界のもつ〔その〕色に対する支配力」とは、有色根の支配力によって⁶⁷、外〔界〕の対象を生ずるからである⁶⁸。

【AS】AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 5v4-5 (Li 2015: 279.23-24, Li & Kano 2014: 55.27-28), Hayashima 24.5-6. Cf. Pradhan 3.6-7.

yathā rūpadhātulakṣaṇam evaṃ śabdagandharasaspraṣṭavyadha[5v5]rmadhātulakṣaṇam.

声・香・味・触・法界の特徴も、色界の特徴⁶⁹と同様である。

【ASBh】注釈せず。

【AS】AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 5v5-6 (Li 2015: 279.24-280.3, Li & Kano 2014: 55.29-33), Hayashima 24.6-9. Cf. Pradhan 3.7-10.

cakṣurvijñānadhātulakṣaṇaṃ katamat. yā cakṣuṣā āśrayeṇa rūpeṇa cālambanena rūpapatibhāsā vijñaptiḥ. yac ca tadbijam upacitam⁽⁶⁹⁾ vaipākyam āla[5v6]yavijñānaṃ tac cakṣurvijñānadhātulakṣaṇam. yathā cakṣurvijñānadhātulakṣaṇam evaṃ śrotraghrāṇajihvākāyamanovijñānadhātulakṣaṇam.

【問】眼識界の特徴は何か。【答】眼という所依と色という所縁によって色の顕現⁷⁰を持つ識

⁽⁶⁶⁾ yac ca] em., yac ASVy-Ms.

⁽⁶⁷⁾ Cf. ASVy-Ms (=AS from ASVy-Ms): yac cakṣurdhātos tatrādhipatyam.

⁽⁶⁸⁾ Cf. ASVy-Ms: indriyādhipatyena. =ASVy-Tib. (D 121a2, P 148a1: dbang po'i dbang gis phyi rol gyi yul 'grub pa'i phyr te) and ASBh-Tib. (D 3a5, P 3b7: dbang po'i dbang gis phyi rol gyi yul 'grub pa'i phyr ro).

⁽⁶⁹⁾ upacitam] em., upacita ASVy-Ms.

別、および積集したそれ（識別）の種子としての〔阿頼耶識ならびに〕異熟の阿頼耶識、それが眼識界の特徴である。耳・鼻・舌・身・意識界の特徴も、眼識界の特徴⁷¹と同様である⁷²。

【ASBh】注釈せず。

1.1.4.3 十二処の特徴

【AS】AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 5v6–6r1 (Li 2015: 280.3–4, Li & Kano 2014: 55.34), Hayashima 24.10. Cf. Pradhan 3.11.

āyatanalakṣaṇaṃ katamat. tad dhātuvad draṣṭavyaṃ ta[6r1]c ca yathāyogam.

【問】処の特徴は何か。【答】それは界と同様に理解されるべきであり、適宜それが〔理解されるべきである〕⁷³。

【ASBh】ASBh-Ms 3v (Tatia 3.1–2), ASVy-Ms 6r1 (Li 2015: 280.5–6), Hayashima 25.8–9.

tad dhātuvad draṣṭavyaṃ tac ca yathāyogam iti yena cakṣuṣā rūpāṇi draṣṭyati yac ca tadbījam ityevamādi yojayitavyam.⁽⁷⁰⁾

「それは界と同様に理解されるべきであり、適宜それが〔理解されるべきである〕⁷⁴とは、「色を見るであろう眼という作具、およびその種子」云々⁷⁵〔という界の特徴〕が、〔処にも同様に〕適用されるべきである〔という意味である〕。

1.1.5 三法の設定（建立）

1.1.5.1 五蘊の設定

1.1.5.1.1 色蘊の設定

【AS】AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 6r1–2 (Li 2015: 280.7–8, Li & Kano 2014: 56.1–2), Hayashima 26.1–2. Cf. Pradhan 3.12–13

rūpaskandhavyavasthānaṃ katamat. yat kiñcid rūpan tat sarvañ catvāri mahābhūtāni catvāri [6r2] ca mahābhūtāny upādāya.

⁽⁷⁰⁾ Cf. ASVy-Ms: yojyaṃ.

【問】色蘊を設定（建立）するものは何か⁷⁶。【答】あらゆる色であり、それら一切は四大種と四大種所造〔色〕である⁽⁷¹⁾。

【ASBh】ASBh-Ms 3v-4r (Tatia 3.3-10), ASVy-Ms 6r2-5 (Li 2015: 280.9-16), Hayashima 27.1-10.

catvāri ca⁽⁷²⁾ mahābhūtāny upādāyēti katham upādāyarūpaṃ catvāri mahābhūtāny upādāya. jananasamñīśrayapratīṣṭhopastambhopabrṃhaṇahetutvena.⁽⁷³⁾ jananādihetutvaṃ punar bhūtānām upādāyarūpe pañcavidhaṃ hetutvaṃ⁽⁷⁴⁾ adhikṛtya. (i) utpattihetutvaṃ tair vinā tadanutpatteḥ. (ii) vṛttihetutvaṃ bhūtāni pratyākhyāyopādāyarūpasya pṛthagdeśā-vaṣṭambhasāma[4r]rthyābhāvāt. (iii) anuvṛttihetutvaṃ bhūtavikāreṇa tatpratīṣṭhitopādāyarūpavikriyāgamanāt.⁽⁷⁵⁾ (iv) sthithetutvaṃ sadṛśotpattikāle bhūtair upādāyarūpasamṭānasyā-nupacchedayogena⁽⁷⁶⁾ samdhāraṇāt. (v) upacayahetutvaṃ vṛddhikālabhūtair⁽⁷⁷⁾ upādāyarūpā-pyāyanād iti.

【問】「四大種所造」⁷⁷というのが、どのようにして所造色は四大種に依るのか⁷⁸。【答】生因・依因・立因・持因・養因としてである⁽⁷⁸⁾⁷⁹。さらに、所造色に対する五種の原因であることに関して、大種は生などの因である⁸⁰。(i)〔大種は生因すなわち〕⁸¹生起の原因である。それら〔大種〕無しに、それら〔所造色〕は生じないからである。(ii)⁸²〔大種は依因すなわち〕⁸³作動の原因である。大種を捨てれば、所造色は〔大種とは〕別個に場所に依る能力を持たないからである。(iii)〔大種は立因すなわち〕⁸⁴随順する原因である。大種が変異することによって、そ

(71) Cf. 『法蘊足論』 T [26] 500c29-501a2:

云何色蘊謂諸所有色一切皆是四大種及四大種所造是名色蘊

『品類足論』 T [26] 692b24-25:

色云何謂諸所有色一切四大種及四大種所造色

PV k 6:

[2](rūpaṃ kata)rac catvāri mahābhūtāni catvā(ri) [ca] ma(hā)bhūtāny upādāya(.)

AA D 302b5-6, P 393b1-2:

de la gzugs ni rnam pa gnyis te 'byung ba dang 'byung ba las gyur ba gzugs so //

ŚrBh₂ (YBh) 108.5-6:

tatra rūpaskandhaḥ katamaḥ / yat kiñcid rūpaṃ sarvaṃ tac catvāri mahābhūtāni catvāri mahābhūtāny upādāya /

PSk 1.6-7:

rūpaṃ katamat / yat kiñcid rūpaṃ sarvaṃ tac catvāri mahābhūtāni catvāri ca mahābhūtāny upādāya //

(72) ASVy-Ms omits ca.

(73) -pratīṣṭhopastambho-] ASBh-Ms, -pratīṣṭasavastambho- ASVy-Ms (read -pratīṣṭhāvaṣṭambho-).

(74) Cf. ASVy-Ms: pañcavidhahetutvaṃ.

(75) Cf. ASVy-Ms: -gamāt.

(76) Cf. ASVy-Ms: -ānucchedayogena.

(77) vṛddhikālabhūtair] ASVy-Ms, vṛttikāle bhūtair ASBh-Ms.

(78) チベット語訳、漢訳に従えば、「【問】「四大種所造」という場合、どのようにして所造色があるのか。【答】「四大種所造」というのは、生因・依因・立因・持因・養因のゆえにである。」と理解される。しかし、構文上 katham は upādāya に対する疑問詞と理解する方が自然であろう。また、ASVy の写本も、この分節での理解を支持する。

れら〔大種〕に依って立つ所造色も変異を被るからである⁸⁵。(iv)〔大種は持因すなわち〕⁸⁶持続の原因である。類似したものが生起するときに、大種は所造色の相続を断絶しない仕方では保持するからである。(v)〔大種は養因すなわち〕⁸⁷成長の原因である。増大した時の大種が、所造色を増大させるからである⁽⁷⁹⁾。

(79) Cf. 玄奘訳『婆沙論』 T [27] 663a27-29:

問此於造色五因皆無如何因義。答雖同類等五因皆無而別有餘五種因義、謂生因依因立因持因養因。由此能造。玄奘訳『婆沙論』 T [27] 681b20-23:

大種與所造色爲幾緣。答因増上。因者五因謂生因依因立因持因養因。増上者謂不礙生及唯無障。

同論書中、他に 644a13、686b5-6、688a12-13 に見える。また、『雜心論』 T [28] 877a10-11:

四大與此諸界五因生。生因依因建立因養因長因。

同論書中、他に 888b9 に見える。また、AKBh-II 102-103:

bhautikasya tu pañcadhā. (AK, II-65b)

bhautikasya tu bhūtāni pañcaprakāro hetuḥ. 【問】katham. 【答】“jananān niḥśrayat sthānād upastambhopapabṛṃhaṇāt” so `yaṃ kāraṇahetur eva punaḥ pañcadhā bhinnāḥ. (i) janānahetus tebhya utpatteḥ. (ii) niśrayahetur jātasya bhūtānuvidhāyitvād¹⁾ ācāryādiniḥśrayavat. (iii) pratiṣṭhāhetur ādhārabhāvāt. citrakūḍyavat.²⁾ (iv) upastambahetur anucchedaheturvāt. (v) upabṛṃhaṇahetur vṛddhihetutvāt.³⁾ evaṃ eṣāṃ janmavikārādhāra-sthitivṛddhihetutvam ākhyātāṃ bhavati.

1) bhūtānuvidhāyitvāt puruṣākārāphalād → bhūtānuvidhāyitvād (櫻部 [1969: 404])

2) -krtyavat → -kūḍyavat (AKVy 29.29)

3) 原文テキストには upabṛṃhaṇahetur vṛddhihetutvāt を欠くも、両漢訳およびチベット語訳、さらにこの箇所をそのまま引用する AKVy 29.29 により、upabṛṃhaṇahetur vṛddhihetutvāt. を挿入して読む。

一方、五通りに種所造 (bhautika) の〔因〕である。(AK, II-65b)

一方、〔大〕種所造〔色〕にとっては、〔大〕種は五種の因である。【問】どのようにしてか。【答】(i) 生によって、(ii) 依によって、(iii) 立によって、(iv) 持によって、(v) 養によってである。能作因そのものがさらに五通りに分けられる。〔すなわち、〕(i) 〔大種は大種所造色の〕生因である。〔大種所造色は〕それら〔大種〕から生起するからである。(ii) 依因である。生じた〔所造色〕は、〔大〕種に随順するからである。〔弟子が〕先生などに依るように。(iii) 立因である。〔大種は所造色を〕保持するものだからである。〔壁〕画〔が描かれた〕壁のように。(iv) 持因である。〔大種は所造色が〕断絶しない因だからである。(v) 養因である。〔大種は所造色の〕成長の因だからである。以上のように、これら〔大種〕が、生起・変異・保持・持続・成長の因であることが説かれたことになる。

また、福原他 [1973: 301] では生等の五因が見られる箇所をまとめ、『順正理論』(T [29] 452a18-c21) において、上座の一派に五因説を非聖教説として認めない者たちがいたことを伝えている点を指摘する。

その他、ManoBh (YBh) 52.12-53.8:

tatra rūpasamudāye tāvad sarvadharmāḥ svabījebhya utpadyante. tat katham. mahābhūtāny upādāya rūpaṃ jāyata ity ucyate. katham ca teṣu niśritam upādāyarūpaṃ bhavati. teṣu pratiṣṭhitam tair upastabdham taīs cānubṛṃhitam iti. tathā hi sarveṣāṃ ādhyātmikabāhyānāṃ bhūtānām upādāyarūpāṇāṃ cādhyātmaṃ cittasantatau bījāni sanniviṣṭāni. tatra tāvad upādāyarūpabījam upādāyarūpaṃ na¹⁾ janayati yāvad bhūtābījena bhūtāny ajanitāni bhavanti. bhūteṣu punar jāteṣu tadupādāyarūpaṃ svabījād evotpadyamānaṃ tadupādāya jātam ity ucyate. tajjātīpūrvaṅgamatvāt. evaṃ bhūtāny asya janakāni bhavanti. katham tanniśritam upādāyarūpaṃ bhavati. tathā hi. utpannam upādāyarūpaṃ bhūtadeśāvinirbhāgeṇa pravartate. katham tat pratiṣṭhitam bhavati. mahābhūtānugrahopaghātaikayīgakṣematvāt. katham tadupastabdham bhavati. tanmātrāvīpraṇāśatayā. katham anubṛṃhitam bhavati. āhāram āgama svapnaṃ brahmacyavāsaṃ vā samādhiṃ vā tadāśritam bhūyobhāvavṛddhivaiḥpulyatāṃ gacchati. tat tadanubṛṃhitam ity ucyate. idaṃ copādāyarūpe mahābhūtānām pañcākāraṃ kārītram veditavyaṃ.

1) 原文テキストには na を欠くも、漢訳およびチベット語訳により na を挿入して読む。

【問】そのうちまず、色聚に関していえば、一切諸法は自己の種子より生起するの、それがどうして、〔四〕大種に依って色が生ずると言われるのか。またどうして所造色はそれら〔四大種〕に依り、それら〔四大種〕

1.1.5.1.1.1 四大種

【AS】AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 6r5–6 (Li 2015: 280.17–19, Li & Kano 2014: 56.3–5), Hayashima 26.2–5. Cf. Pradhan 3.13–16.

catvāri mahābhūtāni katamāni. pṛthivīdhātur abdhātu[6r6]s tejodhātur vāyudhātuḥ. pṛthivīdhātuḥ katamaḥ. kakkhaṭatvam.⁽⁸⁰⁾ abdhātuḥ katamaḥ. dravatvam. tejodhātuḥ katamaḥ. uṣṇatvam. vāyudhātuḥ katamaḥ. laghusamudīraṇatvam.

【問】四大種とは何か。【答】地界・水界・火界・風界である⁽⁸¹⁾⁸⁸。【問】地界とは何か⁸⁹。【答】

に依って立ち、それら〔四大種〕に依って保持され、それら〔四大種〕に依って養われているのか。【答】なぜならば、一切の内的・外的な〔四〕大種と、〔四大種〕所造色の種子は、内的な心相続に存在しているからである。その場合、大種の種子によって、〔四〕大種が生じていない間は、所造色の種子は所造色を生じない。そして〔四〕大種が生じたとき、それら〔四大種〕に依ってある色（所造色）がまさに自己の種子より生じつつある場合、それら〔四大種〕によって生じたと言われる。それら〔四大種〕の生起を先としているからである。このように、〔四〕大種は、こ〔の所造色〕を生じさせるものである。【問】どうして所造色はそれら〔四大種〕に依っているのか。【答】なぜならば、すでに生起した所造色は、大種の場所と不可分離に存在しているからである。【問】どうして〔所造色は〕それら〔四大種〕に依って立っているのか。【答】大種の利益と損害による安危を同一にしているからである。【問】どうして〔所造色は〕それら〔四大種〕に依って保持されているのか。【答】ただそれら〔四大種〕のみによって消失しないからである。【問】どうして〔所造色は四大種に依って〕養われているのか。【答】飲食によってあるいは睡眠、あるいは梵行に住すること、あるいは三昧に〔よって〕、それら〔四大種〕を所依としている〔所造色〕は、より一層増大する。したがって、それら〔四大種〕に依って養われていると言われる。そして、〔四〕大種には所造色に対して以上の五種の作用があると理解されるべきである。

PSkV 6.3–9:

pañcaprakāreṇa janānīśrayapratīṣṭhōpastambhabṛmhaṇānām hetubhāvena bhautikaṃ bhūtāny upādatta ity upādāyaśabdo hetvarthaḥ. tad yathendhanam upādāyāgnir bhavātī tena nimitteneti gamyate. tatra janānāhetutvaṃ tair vinā tadanutpatteḥ. nīśrayāhetutvaṃ bhūtāvikāre tatpratīṣṭhitōpādāyarūpavikṛtyanuvidhānāt. sthānāhetutvaṃ bhūtānām sadṛśasantānotpattau bhautikasyāpi sadṛśasantānānucchedahetutvāt. upastambhahetutvaṃ tadvaśēnānucchedāt. bṛmhaṇāhetutvaṃ bhūtāvṛddhau tadāśritōpādāyarūpavṛddheḥ.

〔四大種は〕生・依・立・持・養にとつての五種の因であるゆえに、大種所造〔色〕は大種に依っている。ゆえに「所造（依ってある）」という語は原因を意味する。例えば、薪に依って火が生ずるというように。〔つまり、〕「その因相によって」と理解される。それら〔五種〕のうち、(i)〔大種が所造色の〕生因であるというのは、それら〔大種〕なしにそれら〔所造色〕は生じないからである。(ii)〔大種が所造色の〕依因であるというのは、大種が変異するとき、それら〔大種〕に依って立つ所造色の変異をも左右するからである。(iii)〔大種が所造色の〕立因であるというのは、〔四〕大種が類似した相続を生じるときに、大種所造〔色〕も類似した相続を断絶させない原因となるからである。(iv)〔大種が所造色の〕持因であるというのは、それら〔大種〕によって〔所造色は〕断絶しないからである。(v)〔大種は所造色の〕養因であるというのは、大種が増大するとき、それに依っている所造色も増大するからである。

⁽⁸⁰⁾ kakkhaṭatvaṃ] em., kakkhyaṭatvaṃ ASVy-Ms.

⁽⁸¹⁾ 『品類足論』T [26] 692b25–26:

四大種者、謂地界・水界・火界・風界。

同様に、PVk 7, AK (I-12ab) 8.11, SavitBh (YBh) 207.5, PSk 1.8–10.

固形性（堅性）である。【問】水界とは何か⁹⁰。【答】液状性（湿性）である。【問】火界とは何か⁹¹。【答】煖熱性（煖性）である。【問】風界とは何か⁹²。【答】軽〔性〕と動性である⁽⁸²⁾。

(82) Cf. 『品類足論』 T [26] 692c11–12; 699c4–5:

地界云何。謂堅性。水界云何。謂濕性。火界云何。謂煖性。風界云何。謂輕等動性。

『癸智論』 T [26] 986c26–29:

地云何。答顯形色。地界云何。答堅性觸。水云何。答顯形色。水界云何。答濕性觸。火云何。答顯形色。火界云何。答煖性觸。風云何。答即風界。風界云何。答動性觸。

AKBh 8.17–22:

svabhāvas tu yathākramam

kharasnehoṣṇateraṇāḥ (AK, I-12d)

kharāḥ pṛthivīdhātuḥ. sneho 'bdhātuḥ. uṣṇatā tejodhātuḥ. īraṇā vāyudhātuḥ. īryate 'nayā bhūtasroto deśāntarotpādanāt praḍīperaṇavad itīraṇā. “vāyudhātuḥ katamo laghusamudīraṇatvam” iti parakaraṇeṣu nirdiṣṭam sūtrānte ca. tat tu laghutvam upādāyarūpam apy uktam prakaraṇeṣu. ato ya īraṇāsvabhāvo dharmāḥ sa vāyudhātur iti karmaṇāsyā svabhāvo 'bhivyaktāḥ.

一方、〔四大種の〕自性は、順次に、

固形（khara 堅）・液状（sneha 湿）・煖熱（uṣṇatā 煖）・浮動（īraṇā 動）である。（AK, I-12d）

地界は堅さであり、水界は湿り気であり、火界は熱さであり、風界は動きである。〔風界によって〕大種の流れが、あたかも灯火の動きのように、他の場所に生じるから、〔色が〕動く作具が動きである（īryate 'nayā itīraṇā）。『品類〔足論〕』や經典には「風界とは何か。軽さと浮動である」と説かれている。だが、『品類〔足論〕』においては「その軽さが所造色である」とも説かれている。このゆえに、浮動を自性とする法が風界である、というように作用（karman）をもってこ〔の風界〕の自性（svabhāva）が明らかにされたのである。

ŚrutBh (YBh) D tshi 174b5–6, P dzi 199b8–200a1:

chos bzhi po 'di dag ni rgyu las byung ba'i gzugs chen po rnam pa du ma 'jug pa'i rten du 'byung ba ste/ sra ba nyid dang / gsher ba nyid dang / tsha ba nyid dang / yang zhing g-yo ba nyid do //

以下の四法は、多くの〔四〕大種所造色が生起する所依となる。〔すなわち、〕固形性（堅性）・液状性（湿性）・煖熱性（煖性）・軽動性（軽等動性）である。

PSk 1.10–2.2:

tatra pṛthivīdhātuḥ katamaḥ. khakkhaṭvatvam. abdhātuḥ katamaḥ. snehaḥ. tejodhātuḥ katamaḥ. uṣmā. vāyudhātuḥ katamaḥ. laghusamudīraṇatvam.

【問】そのうち地界とは何か。【答】固形性（kakkhaṭvatva 堅強性）である。【問】水界とは何か。【答】液状性（sneha 流湿性）である。【問】火界とは何か。【答】煖熱性（uṣman 温燥性）である。【問】風界とは何か。【答】軽〔性〕と動性（laghusamudīraṇatva 軽等動性）である

PSkV 6.16–7.10:

bhūtavat pṛthivīdhātuvādayo 'pi svarūpanirdeśam antareṇa na vijñāyanta iti punar api praśnaḥ — pṛthivīdhātuḥ katama ityādi. khakkhaṭvatvam iti bhāvapratyayo 'tra svārthikāḥ khakkhaṭvam eva khakkhaṭvatvam, na hy atra bhāvāntaram asti. khakkhaṭṭhaḥ kharāḥ krūra itī paryāyāḥ. sneho 'bdhātur iti saṃśrayātmakatvād dravatvād vā snehaḥ. dāhakatvād uṣmā¹⁾ tejodhātuḥ. vāyudhātur laghusamudīraṇatvam iti. laghutvam vāyudhātur ity ucyamāna upādāyarūpasyāpi bhūtattvam prasajyeta. īraṇam vāyudhātur ity ucyamāne karmavāsyā nirdiṣṭam syān na svarūpam ity ato 'sya laghutvād upādāyarūpāt karmaṇas ca vyavacchedārtham evam uktam laghusamudīraṇatvam vāyudhātur iti. samudīraṇatvam punar bhāvasrotaso nairantaryeṇa deśāntarotpatīhetutvam.

1) PSk: uṣmā

大種と同様に、地界なども自性の解説なしには知られない。ゆえにさらに「地界とは何か」と質問する。「固形性（khakkhaṭvatva）」という性質を意味する接尾辞（bhāvapratyaya）は、〔語〕本来の意味を持つもの（svārthika）である。〔つまり〕「固さ（khakkhaṭṭha）」と「固形性（khakkhaṭvatva）」は同じである。なぜならば、ここでは別個のものではないからである。「固（khakkhaṭṭha）」と「堅（khara）」と「硬（krūra）」は同義語である。「水界とは、液状性（sneha）である」¹⁾とは、依（saṃśraya）²⁾を自体とするものであるから、液状性である。燃やすものであるから、火界とは、熱性である。「風界とは、軽〔性〕と動性である」とは、「風界とは、軽性であ

【ASBh】 注釈せず。

1.1.5.1.1.2 所造色

【AS】 AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 6r6–6v1 (Li 2015: 280.20–22, Li & Kano 2014: 56.6–8), Hayashima 26.5–8. Cf. Pradhan 3.16–18.

upādāyarū[6v1]paṃ katamat. cakṣurindriyaṃ śrotrendriyaṃ ghrāṇendriyaṃ jihvendriyaṃ kāyendriyaṃ rūpaṃ śabda gandho rasaḥ spraṣṭavyaikadeśo dharmāyatanādikañ ca rūpaṃ.

【問】 所造色とは何か⁹³。【答】 眼根・耳根・鼻根・舌根・身根⁹⁴・色・声・香・味、および所触の一部⁽⁸³⁾、法処などに〔所属する〕色である⁽⁸⁴⁾。

【ASBh】 注釈せず。

1.1.5.1.1.2.1 五根

【AS】 AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 6v1–4 (Li 2015: 280.22–28, Li & Kano 2014: 56.9–14), Hayashima 26.8–13. Cf. Pradhan 3.18–23.

る」と〔のみ〕言われる場合、所造色も大種となる過失の付随があろう。「風界とは、動性である」と言われる場合、こ〔の風界〕の作用 (karman) が説かれているであろうが、自性が〔説かれているの〕ではない。ゆえに、こ〔の風界〕には軽快性があるから、〔この風界を〕所造色と作用から区別するために、「風界とは、軽〔性〕と動性である」とこのように説かれたのである。さらに動性とは、存在の流れが、断絶せずに別の場所に生じる原因であることである。

1) チベット語訳は、本論の通り「水界とは何か。液状性である」(P 5a7: chu'i khams gang zhe na / gsher ba nyid do) となっている。

2) チベット語訳は'du bar byed pa.

⁽⁸³⁾ 大種を除外するから「一部」と言う。

⁽⁸⁴⁾ Cf. 『品類足論』 T [26] 692b26–27:

所造色者、謂眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・色・声・香・味、所觸一分、及無表色。

SavitBh (YBh) 207.6–7:

catvāri mahābhūtāny upādāya rūpaṃ katamat. daśa rūpīny āyatanāni dharmāyatanaparyāpannaṃ ca rūpaṃ.

【問】 四大種に依ってある色 (四大種所造色) とは何か。【答】 十有色処と法処所撰色とである。

PSk 2.3–5:

upādāyarūpaṃ katamat. cakṣurindriyaṃ śrotrendriyaṃ ghrāṇendriyaṃ jihvendriyaṃ kāyendriyaṃ rūpaṃ śabda gandho rasaḥ spraṣṭavyaikadeśo `vijñaptiś ca.

caḥsurindriyaṃ katamat. catvāri mahābhūtāny upādāya caḥsur[6v2]vijñānasanniśrayo⁽⁸⁵⁾
rūpaprasādaḥ. śrotrendriyaṃ katamat. catvāri mahābhūtāny upādāya śrotavijñānasanniśrayo
rūpaprasādaḥ. ghrāṇendriyaṃ katamat. catvāri mahābhūtāny u[6v3]pādāya ghrāṇa-
vijñānasanniśrayo⁽⁸⁶⁾ rūpaprasādaḥ. jihvendriyaṃ katamat. catvāri mahābhūtāny upādāya
jihvāvijñānasanniśrayo rūpaprasādaḥ. kāyendriyaṃ katamat. catvāri ma[6v4]hābhūtāny upādāya
kāyavijñānasanniśrayo rūpaprasādaḥ.

【問】眼根とは何か⁹⁵。【答】四大種所造であって、眼識の拠り所である透明清浄な色である⁹⁶。
【問】耳根とは何か⁹⁷。【答】四大種所造であって、耳識の拠り所である透明清浄な色である⁹⁸。
【問】鼻根とは何か⁹⁹。【答】四大種所造であって、鼻識の拠り所である透明清浄な色である¹⁰⁰。
【問】舌根とは何か¹⁰¹。【答】四大種所造であって、舌識の拠り所である透明清浄な色である¹⁰²。
【問】身根とは何か¹⁰³。【答】四大種所造であって、身識の拠り所である透明清浄な色である⁽⁸⁷⁾¹⁰⁴。

⁽⁸⁵⁾ caḥsur-] em., caḥsuḥ ASVy-Ms.

⁽⁸⁶⁾ Cf. ASVy-Ms: -vijñānasanniśrayo.

⁽⁸⁷⁾ Cf. 『品類足論』 T [26] 692c12–16:

眼根云何。謂眼識所依淨色。耳根云何。謂耳識所依淨色。鼻根云何。謂鼻識所。依淨色。舌根云何。謂舌識所依淨色。身根云何。謂身識所依淨色。

『雑心論』 T [28] 872b8–9:

彼眼入者、眼識所依、四大所造淨色、不可見、有對。耳・鼻・舌・身亦如是。

AKBh-I 5.24–6.6:

【第一釈】 tatra ya ete pañca rūpādayo 'rthā uktāḥ.

tadvijñānāśrayā rūpaprasādās caḥsurādayaḥ. (AK, I-9cd)

rūpaśabdagandharasaspraśṭavyavijñānānām āśrayabhūtā ye pañca rūpātmakāḥ prasādās te yathākramaṃ
caḥsuḥśrottraghrāṇajihvākāyā veditavyāḥ. yathoktaṃ bhagavatā
caḥsur bhikṣo ādhyātmikam āyatanam catvāri mahābhūtāny upādāya rūpaprasādāḥ
iti vistaraḥ.

【第二釈】 atha vā yāny etāni caḥsurādīny uktāni

tadvijñānāśrayā rūpaprasādās caḥsurādayaḥ. (AK, I-9cd 再出)

caḥsurvijñānādyāśrayā ity arthaḥ. evaṃ ca kṛtvā prakaraṇāgrantho 'py anuvṛtto bhavati.

caḥsuḥ katamat. caḥsurvijñānāśrayo rūpaprasādāḥ

iti vistaraḥ. nirdiṣṭāni pañcendriyāni.

【第一釈】 そのうち、色などの五境がすでに説かれたが、

それらの識の拠り所である透明清浄な色が眼などである。(AK, I-9cd)

色・声・香・味・触に対する識の拠り所であって、色〔法〕を自体とする五つの透明清浄なるものが、順次に、
眼・耳・鼻・舌・身であると理解されるべきである。世尊が説かれる通りである。

比丘よ！ 眼〔根〕は、内なる処であり、四大種に依って透明清浄な色である¹⁾。

云々と。

【第二釈】 あるいは、眼などがすでに説かれたが、

それらの識の拠り所である透明清浄な色が眼などである。(AK, I-9cd 再出)

〔「それらの識の拠り所」とは、「眼識などの拠り所」という意味である。そしてこのように考えるならば、

【問】 眼根とは何か。【答】 眼識の所依であり、浄色である²⁾。

云々という『品類〔足〕論』と合致することになる。五根を説きおわたつた。

¹⁾ 『雑阿含』 第 322 経「眼内入処経」(T [2] 91).

2) 『品類足論』 T [26] 692c12–16.

PañcBh (YBh) 4.9–10:

caḅṣuḥ katamaḥ. catvāri mahābhūtāny upādāya caḅṣurvijñānaśaṃnīśrayo rūpaprasādo 'nidarśanaḥ sapratigḥaḥ.

【問】眼とは何か。【答】四大種所造であり、眼識の拠り所である透明清浄な色（浄色）であって、見えず（無見）抵触有るもの（有対）である。

耳鼻舌身についても類似表現が繰り返される。Cf. PañcBh (YBh) 6.7–8, 7.8–9, 8.1–2, 8.16–17.

他に、『顕揚論』 (T [31] 483c9–11)、および PSk 2.6–10:

tatra caḅṣurindriyaṃ katamat. varṇaviśayo rūpaprasādaḥ. śrotrendriyaṃ katamat. śabdaviśayo rūpaprasādaḥ. ghrāṇendriyaṃ katamat. gandhaviśayo rūpaprasādaḥ. jihvendriyaṃ katamat. rasaviśayo rūpaprasādaḥ. kāyendriyaṃ katamat. spraṣṭavyaviśayo rūpaprasādaḥ.

【問】眼根とは何か。【答】顕〔色〕を対象とする透明清浄な色である。【問】耳根とは何か。【答】声を対象とする透明清浄な色である。【問】鼻根とは何か。【答】香を対象とする透明清浄な色である。【問】舌根とは何か。【答】味を対象とする透明清浄な色である。【問】身根とは何か。【答】所触を対象とする透明清浄な色である。

PSkV 9.1–10.17:

caḅṣurindriyaṃ kiṃsvabhāvam. varṇaviśayo rūpaprasāda ity tatsvabhāvaviśakaraṇam. catvāri mahābhūtāny upādāyati prakṛtatvāt sambadhyate. varṇo nilapītādikaś catuḥprakāraḥ varṇālocanād varṇanirbhāsāsādhāraṇakāraṇatvād vā varṇo viśayo 'syeti varṇaviśayaḥ. ayaṃ cātra prasādārthaḥ, tad-yathā prasanna ādarśa udakapātre vā bimbaṃ pratītya tatpratibhāsaṃ pratibimbam utpadyate, tadvat pañcasu rūpaprasādātmakeṣu caḅṣurādīṣu rūpagandhādīn pratītya tatpratibhāsā vijñaptaya utpadyante. atra caḅṣurādīnāṃ parasparato viśayarūpātmakāt prasādān manastaḥ śraddhātaś ca vyavacchedaḥ kāryaḥ. rūpaprasādātmakeṣu varṇaviśayatvāviśeṣāc ca ubhayaṃ ucyate varṇaviśayo rūpaprasāda ity ca. tatra varṇaviśayatvena śrotrādībhyo viśayaprasādāc ca vyavacchinatti. na hi śrotrādāyo viśayaprasādo vā varṇaviśayo 'sti. rūpaprasādātmakeṣu manasto vyavacchinatti. tad dhi saty api varṇaviśayatve na rūpaprasādātmakeṣu rūpagrahaṇaṃ śraddhātmakeṣu prasādād vyavacchedakam. śraddhāpi hi prasādātmikā rūpādiviśayā cety ato rūpagrahaṇam. varṇaviśayaḥ prasādaś caḅṣurindriyam ity ucyamāne śraddhāyā api prasāga ity ato rūpagrahaṇaṃ kriyā ity, śraddhāyā arūpātmakatvāt.

caḅṣurādīni hi indantīndriyāṇi. īśanta ity arthaḥ, ādhipatyam asmin saṅghāte kurvantīty arthaḥ. ataś cādhipatyārtha indriyārthaḥ, indantīndriyāṇi. evam indrāṇīti prāpnoti. nipātanād indriyam iha bhaviśyati. evam api dhātvartho vaktavyaḥ. sa ca nokta ity ayaṃ parihāraḥ. vijñānavad eva kṛt syāt. tadyathā vijñānīti vijñānam ity prāpte lyudartham anādṛtya vijñānam uktaṃ tadvyatirikta vijñāntṛṣaṅgrahavyudāsārtham, evam ihāpindriyavyatirikta liṅgakaḥ parānāvvyudāsārtham evam uktaṃ syād ity.

yathaiva hi caḅṣurādīnāṃ viśayīnāṃ parasparato viśayabheda bhedā uktaḥ — caḅṣurindriyaṃ katamat. varṇaviśayo rūpaprasādaḥ. śrotrendriyaṃ katamat. śabdaviśayo rūpaprasāda ityevamādi, evaṃ rūpādīnāṃ api viśayānāṃ caḅṣurādībhīr viśayībhīr bhedā ucyate. caḅṣuḥ eva viśayo rūpam, na śrotrādīnāṃ, tadviśayānāṃ śabdādītvena vyavasthānāt. atra ca manaso na vidhir na pratīśedho 'prakṛtatvāt. evaṃ ca rūpādīnāṃ parasparato bhedā ukto bhavati — caḅṣuḥ viśayo rūpam eva, nārūpam ity. evam api nilapītādīnāṃ parasparavilakṣaṇānāṃ caḅṣurindriyaviśayānāṃ rūpatvenābheda ukto bhavati.

【問】眼根はいかなる自性を持つのか。【答】「顕〔色〕（いろ）を対象とする透明清浄な色である」とは、そ〔の眼根〕の自性を説示している。「四大種所造」というのが主題とされているのだから、脈絡はある。顕〔色〕（いろ）とは青などの四種類である。顕〔色〕を觀照するもの（ālocana）であるから、顕〔色〕の顯現（nirbhāsa）を持つもの（原因¹⁾）であるから、「顕〔色〕という対象を持つもの」というのが「顕〔色〕を対象とするもの（varṇaviśaya）」〔という複合語の分解解釈である〕。そしてここでのこ〔の「顕色を境とするもの」〕は透明清浄の意味である。例えば、清らかな鏡（ādarśa）あるいは水の入った皿（udakapātra）の中に、〔それに映る実際の〕像（bimba）を縁として、そ〔の像〕の顯現（pratibhāsa）を持った影像（pratibimba）が生じる。それと同様に、透明清浄な色を自体とする眼などの五〔根〕に、色・香などを縁として、そ〔の色など〕の顯現を持つ識別（vijñapti）が生じる。この場合、眼などは、相互に、また対象としての色を自体とする透明（prasāda）、意、信から区別されるべきである。「透明清浄な色を自体とするものである」との区別がないことによって、また「顕〔色〕を対象とするものである」との区別がないことによって、「色を境とするもの」

【ASBh】注釈せず。

の」と「透明清浄な色」との二つが述べられる。そのうち、「顕〔色〕を対象とするもの」とあることによって、〔眼を〕耳などから、また境としての透明から区別する。なぜならば、耳などは境としての透明でも、顕〔色〕を対象とするものでもないからである。「透明清浄な色を自体とするもの」とあることによって、〔眼を〕意から区別する。なぜならば、そ〔の意〕は、顕〔色〕を対象とすることがあるとしても、透明清浄な色を自体とすることはないからである。色という語を用いるのは、〔眼を〕信 (śraddhā) を自体とする淨信 (prasāda) から区別する。なぜならば、信も淨 (prasāda) を自体とするものであり、顕〔色〕などを境とするものだからである。ゆえに「色」という語の使用がある。「眼根とは、顕〔色〕を対象とするものであり、透明清浄である」と言われる場合、信ともなるとの過失の付随がある。ゆえに「色」という語が用いられる。信は無色を自体とするものだからである。

実に眼などは、力あるから根である (indantīndriyāni)²⁾。「自在力ある (īśante)」という意味である。この集合において、支配力 (ādhipatyā) を為すという意味である。そしてこのゆえに、支配力の意味が根の意味である。力あるから根である³⁾。【反論】このよう〔に語源解釈されるの〕であるなら、「〔根〕 (indriya) ではなく」〔力あるもの〕 (indra) ということになってしまう。この場合では、不規則な使用 (nipātana) によって、根 (indriya) 〔という語形〕となろう。このようであるとしても、語根の意味が説明されるべきであるが、それは説明されていない。【答論】答弁は以下のようである。識 (vijñāna) と全く同様に、第一次派生接尾辞であろう。例えば、「識るから識である (識る主体が識である viñānātī vijñānam)」ということになる場合、lyuṭ接尾辞 (ana) の意味に注意を払わず、「識」と説かれる。そ〔の識〕とは別の識る主体 (vijñātr= ātman) を否定するためである。この場合も同様に、根 (indriya) とは別の男性器 (liṅga) を構想することを否定するためにこのように説かれたのである⁴⁾。

実に対象を有するものである眼などには、相互に対象の異なりによって区別があることが、「眼根とは何か。顕〔色〕を対象とする透明清浄な色である。眼根とは何か。声を対象とする透明清浄な色である」云々と説かれたのと同様に、対象である色などにもまた、対象を有するものである眼などによる区別があることが説かれる。色は眼のみの対象であって、耳などの〔対象〕ではない。それら〔耳など〕の対象は声などであると設定されているからである。そしてここでは意は、主題とされていないから、規定もされないし否定もされない。そしてこのようであれば、「眼の対象は色のみであって、非色ではない」というように、色などに相互に区別があることが説かれたことになる。このようであるので、青・黄などの眼根の対象は、相互に多様であるけれども、色であると区別なく説かれたことになる。

1) チベット語訳は、「顕〔色〕の顕現〔を持つ〕識の特有の原因」(kha dog tu snang ba'i rnam par she pa'i thun mong ma yin pa'i) となっている。

2) AKBh 38.3: indantīndriyāni.

3) AKBh 38.3: tasya indantīndriyāni. ata ādhipatyārtha indriyārthaḥ.

4) 【反論】このよう〔に語源解釈されるの〕であるなら～説かれたのである」:

AKTA D 139b4-6, P 166a4-6:

de lta na yang gha tsa'i don brjod par bya dgos na de yang ma smos pas so // 'di ni lan ma yin no // 'di ni rnam par shes dang 'dra bar (P 166a5) 'gyur te/ dper na rnam par shes (D 139b5) par byed pas na rnam par rigs pa'o zhes bya bar 'gyur ba ni/ de las tha dad pa'i shes pa pos bsdus pa bsal bal bya ba'i phir/ lu Ta'i don la gus pa med par byas te/ rnam par shes pa shes pa zhes (P 166a6) bshad pa de bzhin du 'dir yang dbang byed pa zhes bya ba dang po las tha dad pa'i (D 139b6) rtags su rtog pa bsal bar bya ba'i phir ro //

1.1.5.1.1.2.2 色境

【AS】 AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 6v4-6 (Li 2015: 280.28-281.1, Li & Kano 2014: 56.14-19), Hayashima 28.1-5. Cf. Pradhan 3.23-4.1

rūpaṃ katamat. catvāri mahābhūtāny upādāya cakṣurindriyagocaro yo 'rthaḥ. tadyathā nīlam pītaṃ lohita[6v5]m avadātaṃ dīrghaṃ hrasvaṃ vṛttaṃ parimaṇḍalam aṇu sthūlaṃ⁽⁸⁸⁾ sātaṃ visātaṃ unnataṃ avanataṃ chāyātapa āloko 'ndhakāram abhraṃ dhūmo rajo mahikā abhyavakāśaṃ vijñaptir nabhaś cā[6v6]py ekavarṇam. tat punaḥ suvarṇaṃ durvarṇaṃ tadubhayāntarasthāyi⁽⁸⁹⁾ varṇanibham.

【問】色とは何か¹⁰⁵。【答】四大種所造であって、眼根の領域となる対象である。すなわち、「1. 青・2. 黄・3. 赤・4. 白」、「5. 長・6. 短・7. 方・8. 円・9. 細・10. 麤・11. 正・12. 不正・13. 高(凸)・14. 下(凹)」、「15. 影・16. 光・17. 明・18. 闇・19. 雲・20. 煙・21. 塵・22. 霧」、23. 空き地、24. 表、また 25. 空(そら)という一つの色彩(顯色)である。さらにそ〔の色〕は¹⁰⁶、美しい色彩、醜い色彩、それらの中間に位置する色彩のごときものである⁽⁹⁰⁾。

【ASBh】 ASBh-Ms 4r (Tatia 3.11-15), ASVy-Ms 6v6-7r2 (Li 2015: 281.2-6), Hayashima 29.1-5.

nīlādīnām pañcaviṃśatīnām rūpāṇām vyavasthānaṃ ṣaḍbhir ākārair veditavyam. (i) lakṣaṇataḥ (ii) saṃniveśato (iii) 'nugrahopaghātataḥ (iv) kriyāsaṃniśrayataḥ (v) kriyālakṣaṇataḥ (vi) maṇḍanataś⁽⁹¹⁾ ca caturṇām daśānām aṣṭānām ekasyaikasyaikasya⁽⁹²⁾ ca yathākramam. tatrābhyavakāśas tadanyaprativārakaspraṣṭavyarahito yo deśaḥ.⁽⁹³⁾ nabho yad upariṣṭān nīlam dr̥śyate.

六つの在り方ゆえに、青などの二十五種¹⁰⁷の色が設定されると理解されるべきである。(i) 特徴の点から、(ii) 配列の点から、(iii) 利益と損害の点から、(iv) 行動の抛り所の点から、(v) 行動の特徴の点から、(vi) 装飾の点から、順次に、四つ〔の色〕、十〔の色〕、八つ〔の色〕、一つ〔の色〕、一つ〔の色〕、一つ〔の色〕が〔設定される〕¹⁰⁸。そのうち、空き地とは、それ以外の妨害する所触を欠いた場所(他によって妨害されない空間)である。空(そら)とは¹⁰⁹、上空に青として見られるものである¹¹⁰。

⁽⁸⁸⁾ Cf. ASVy-Ms: sthūla.

⁽⁸⁹⁾ -sthāyi] em. (=ASVy-Ms?). Li [2015] は ASVy-Ms を -sthāpi と翻刻するが、元の写本は -sthāyi であった可能性が高い。Cf. PañcBh (YBh) 5.11: tadubhayāntarasthāyi vā varṇanibham.

⁽⁹⁰⁾ Cf. PañcBh (YBh) 4.12-5.11; 『顯揚論』 T [31] 483c14-19.

⁽⁹¹⁾ Cf. ASVy-Ms: maṇḍalataś.

⁽⁹²⁾ ekasyaikasyaikasya] ASVy-Ms, ekaikasya ASBh-Ms.

⁽⁹³⁾ Cf. ASVy-Ms: deśa upalabhyate.

1.1.5.1.1.2.3 声境

[AS] AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 7r2-3 (Li 2015: 281.7-10, Li & Kano 2014: 56.20-23), Hayashima 28.5-8.
Cf. Pradhan 4.1-4

śabdaḥ katamaḥ. catvāri mahābhūtāny upādāya śrotrendriyagrāhyo yo 'rthaḥ. manojñō vāmanojñō⁽⁹⁴⁾ vā nobhayo vā. upāttamahābhūtahetuko vānupātta[7r3]mahābhūtahetuko vā tadubhayo vā. lokaprasiddho vā siddhohanīto vā. parikalpito vā. āryavyāvahāriko⁽⁹⁵⁾ vā. anāryavyāvahāriko⁽⁹⁶⁾ vā.

【問】 声とは何か¹¹¹。**【答】** 四大種所造であつて、耳根によって把握される対象である。心地よい（可意）〔声〕、あるいは不快な（不可意）〔声〕、あるいはどちらでもない〔声〕、あるいは有執受大種を因とする（現在位にある根（感官）を離れていない大種を原因とする）〔声〕、あるいは無執受大種を因とする〔声〕、あるいはそれら両方〔を因とする声〕、世間で一般的に承認されている〔声〕、あるいは成就者によって伝授された〔声〕、あるいは構想された〔声〕、あるいは聖者の言語表現〔に属する声〕、非聖者の言語表現〔に属する声〕である¹¹²。

[ASBh] ASBh-Ms 4r-4v (Tatia 3.16-22), ASVy-Ms 7r3-6 (Li 2015: 281.11-17), Hayashima 29.6-14.

śabdavyavasthānam⁽⁹⁷⁾ lakṣaṇato 'nugrahopaghātataḥ⁽⁹⁸⁾ hetuprabhedato deśanāprabhedato vyavahāraprabhedataś ca. lakṣaṇataḥ śrotrendriyagrāhyo yo 'rtha itī. [4v] deśanāprabhedato **lokaprasiddhādayas** trayāḥ. śeṣaṃ yathāyogaṃ veditavyam.⁽⁹⁹⁾ tatropāttamahābhūtahetukas tadyathā vācchabdaḥ. **anupāttamahābhūtahetukas** tadyathā vṛkṣaśabdaḥ. **tadubhayas** tadyathā hastamṛdaṅgaśabdaḥ.⁽¹⁰⁰⁾ **lokaprasiddho** laukikabhāśasaṃgrhītaḥ.⁽¹⁰¹⁾ **siddhohanīta** āryair deśītaḥ. **parikalpitas** tīrthyair deśītaḥ. **āryānāryavyāvahārikau**⁽¹⁰²⁾ tu dṛṣṭādīn aṣṭau vyavahārān adhikṛtya veditavyau.

⁽⁹⁴⁾ Cf. ASVy-Ms: mano<vi>jñō vā amano<vi>jñō. (Both *vis* are inserted by the scribe in the margin of the manuscript.)

⁽⁹⁵⁾ āryavyāvahāriko] em., āryavyāvahāriko ASVy-Ms.

⁽⁹⁶⁾ anāryavyāvahāriko] em., anāryavyāvahāriko ASVy-Ms.

⁽⁹⁷⁾ Cf. ASVy-Ms: śabdaḥ vyavasthānam.

⁽⁹⁸⁾ Cf. ASVy-Ms: anugrāho-.

⁽⁹⁹⁾ Cf. ASVy-Ms: lokaprasiddhādayo yathāyogaṃ veditavyāḥ.

⁽¹⁰⁰⁾ Cf. ASVy-Ms: stadubhayo hastamṛdaṅgaśabdaḥ. (tadyathā is omitted.)

⁽¹⁰¹⁾ Cf. ASVy-Ms: -bhāsā-.

⁽¹⁰²⁾ -vyāvahārikau] em., -vyavahārikau ASBh-Ms & ASVy-Ms.

¹¹³ 特徴の点から、利益と損害の点から、原因の区別の点から、教説の区別の点から、言語表現の区別の点から、声は設定（建立）される。特徴の点からは、「耳根によって把握される対象」と〔設定される〕¹¹⁴。教説の区別の点からは、世間で一般的に承認されている〔声〕などの三つが〔設定される〕。残りは適宜理解されるべきである。そのうち、有執受大種を因とする〔声〕とは、例えば話し声〔など〕¹¹⁵である。無執受大種を因とする〔声〕とは、例えば樹木の音〔など〕¹¹⁶である。それら両方〔を因とする声〕とは、例えば手〔で〕太鼓〔を打つ〕音〔など〕¹¹⁷である。世間で一般的に承認されている〔声〕とは、世間一般の会話に含まれるものである。成就者によって伝授された〔声〕とは、聖者たちにより教示された〔声〕である。構想された〔声〕とは、異教徒たちにより教示された〔声〕である。聖者・非聖者の言語表現〔に属する声〕とは、見などの八つの言語表現⁽¹⁰³⁾に関して理解されるべき〔声〕である。

1.1.5.1.1.2.4 香境

【AS】 AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 7v1 (Li 2015: 281.18–19, Li & Kano 2014: 56.24–25), Hayashima 32.1–2. Cf. Pradhan 4.5–6.

[7v1] gandhaḥ katamaḥ. catvāri mahābhūtāny upādāya⁽¹⁰⁴⁾ ghrāṇendriyagrāhyo yo 'rthaḥ. sugandho vā durgandho vā sahajo vā sāmyogiko vā pārīṇāmiko vā.

【問】 香とは何か¹¹⁸。**【答】** 四大種所造であって、鼻根によって把握される対象である。好い香、悪い香、本来の〔香〕、和合した〔香〕、変異した〔香〕である⁽¹⁰⁵⁾¹¹⁹。

【ASBh】 ASBh-Ms 4v (Tatia 3.23–25), ASVy-Ms 7v1–2 (Li 2015: 281.20–22), Hayashima 33.1–3.

gandhavyavasthānaṃ lakṣaṇato⁽¹⁰⁶⁾ 'nugrahopaghātataḥ prabhedatāś ca. rasavyavasthānam apy evam eva vedītavayam.⁽¹⁰⁷⁾ tatra **sahajo** gandhaś⁽¹⁰⁸⁾ candanādīnām, **sāmyogiko** dhūpayukty-ādīnām, **pārīṇāmikaḥ** pakvaphalādīnām iti.

¹²⁰ 特徴の点から¹²¹、利益と損害の点から、区別の点から¹²²、香は設定（建立）される。〔次

⁽¹⁰³⁾ 八つの言語表現とは、見・聞・覚・知に関する四つの言語表現が、聖者・非聖者各々にあることを指す。

⁽¹⁰⁴⁾ Cf. ASVy-Ms: upāya.

⁽¹⁰⁵⁾ Cf. 『顯揚論』 T [31] 483c26–484a1.

⁽¹⁰⁶⁾ lakṣaṇato] ASVy-Ms, svalakṣaṇato ASBh-Ms.

⁽¹⁰⁷⁾ ASVy-Ms では、“rasavyavasthānam apy evam eva vedītavayam”を欠き、代わりに、rasa の解説 (AS) に対する ASBh の注釈として“rasavyavasthānaṃ gandhavad vedītavayam”が見られる。この異同に関して、概ね、ASBh-Ms と ASBh-Tib. とは一致し、ASVy-Ms と ASVy-Tib. と『雜集論』とは一致する。

⁽¹⁰⁸⁾ Cf. ASVy-Ms: sahajo yo gandhaś.

pipāsā tṛptir balyaṃ daurbalyaṃ⁽¹¹⁵⁾ mūrccā kaṇḍuḥ⁽¹¹⁶⁾ picchilatvaṃ vyādhir jarāmarāṇaṃ śrama viśrama ūrjā ca.

【問】所触の一部とは何か¹²⁷。【答】四大種所造であって、身根によって把握される対象である。滑らかさ、粗雑さ、重さ、軽さ、やわらかさ¹²⁸、ゆるさ、きつさ、冷たさ、ひもじさ、渴き、満腹感、力強さ、脆弱さ、麻痺、痒さ、粘り気、病、老い、死、疲労、回復、健康である⁽¹¹⁷⁾。

【ASBh】ASBh-Ms 4v-5r (Tatia 3.26-4.2), ASVy-Ms 7v5-8r1 (Li 2015: 282.5-9), Hayashima 33.4-8.

spraṣṭavyaikadeśavyavasthānam āmarśanata ātulanataḥ sparśanata āpīḍanataḥ saṃsargato⁽¹¹⁸⁾ dhātuvaiṣamyasāmyataś ca. abvāyusaṃsargāc [5r] **chītam**. aprṥthivīsaṃsargāt **picchalam**.⁽¹¹⁹⁾ **viśrāmo balam ūrjā** ca dhātusāmyāt. **ūrjā** punar vaiśārdyaṃ veditavyam. **tṛptir** ubhayathā. śeṣā **jighatsādayo**⁽¹²⁰⁾ dhātuvaiṣamyād veditavyāḥ.

¹²⁹ 摩擦の点から、計量の点から、肌触りの点から、圧迫の点から、接触の点から、界の不調和と調和の点から、所触が設定される。水と風とが和合するから、冷たさがある。地と水とが和合するから、粘り気がある。界が調和しているから、回復・力強さ・健康がある。さらに健康とは、〔病気などに対して〕恐れないことであると理解されるべきである¹³⁰。満腹感は、〔界の調和と不調和との〕両者による。界が不調和であるから、残りのひもじさなど¹³¹があると理解されるべきである。

1.1.5.1.1.2.7 法処所摂色⁽¹²¹⁾

【AS】AS-Ms 欠葉, ASVy-Ms 8r1-2 (Li 2015: 282.9-10, Li & Kano 2014: 56.33-34), Hayashima 32.8-10. Cf. Pradhan 4.12-14.

dhārmāyatanikaṃ rūpaṃ⁽¹²²⁾ katamat. tat pañcavidhaṃ draṣṭavyam. ābhisaṃkṣepikaṃ ābhyavakāśikaṃ sāmādānikaṃ pārikalpikaṃ [8r2] vaibhutvikaṃ ca.

⁽¹¹⁵⁾ daurbalyaṃ] em., durbalyaṃ ASVy-Ms.

⁽¹¹⁶⁾ kaṇḍuḥ] em., kāṇḍuḥ ASVy-Ms.

⁽¹¹⁷⁾ Cf. 『顯揚論』 T [31] 484a5-12.

⁽¹¹⁸⁾ Cf. ASVy-Ms: saṃsarkṛtaḥ.

⁽¹¹⁹⁾ Cf. ASVy-Ms: picchilaṃ.

⁽¹²⁰⁾ Cf. ASVy-Ms: jirghatsāpīpāsādayo.

⁽¹²¹⁾ 法処所摂色については以下を参照。Cf. 『義林章』(T [45] 340b28-343a25), ツルティム・ケサン [2002: 405-407], 車 [1995: 136-138], 加藤 [1995: 174-177] [1996: 24-28] .

⁽¹²²⁾ Cf. ASVy-Ms: rūpaṃṅ.

【問】法処に属する色とは何か¹³²。【答】それは五種であると理解されるべきである¹³³。〔すなわち、〕〔最小に〕集約された〔色〕、空虚〔な色〕、〔行為によって〕引き受けられた〔色〕、構想による〔色〕、自在力によって生み出された〔色〕である⁽¹²³⁾。

【ASBh】 ASBh-Ms 5r (Tatia 4.3–5), ASVy-Ms 8r2–3 (Li 2015: 282.12–14), Hayashima 33.9–11.

ābhisamkṣepikaṃ⁽¹²⁴⁾ paramāñurūpam. **ābhyavakāśikaṃ** tad eva yathoktaṃ⁽¹²⁵⁾ tadanya-prativāraḥkṣepikārahitam. **sāmādānikaṃ** avijñaptirūpam. **parikalpitaṃ** pratibimbarūpam. **vaibhūtvikaṃ**⁽¹²⁶⁾ vimokṣadhyāyigocaro yad rūpam.⁽¹²⁷⁾

〔最小に〕集約された〔色〕とは、極微としての色である。空虚〔な色〕とは、「それ以外の妨害する所触を欠いた」と上述した⁽¹²⁸⁾¹³⁴のと同じものである。〔行為によって〕引き受けられた〔色〕とは、無表色である。構想された〔色〕とは、〔瞑想における骨骸などの〕影像の色である。自在力によって生み出された〔色〕とは、解脱における静慮の領域である色である。

⁽¹²³⁾ Cf. 『顕揚論』 T [31] 484a12–21

⁽¹²⁴⁾ ābhisamkṣepikaṃ] em., ābhisamkṣepikaṃ ASBh-Ms/ASVy-Ms

⁽¹²⁵⁾ Cf. ASVy-Ms omits yathoktaṃ.

⁽¹²⁶⁾ vaibhūtvikaṃ] ASVy-Ms (=佐久間 [1996: 5]), vaibhūtvikaṃ ASBh-Ms.

⁽¹²⁷⁾ -gocaro yad rūpam] ASVy-Ms, -gocaraṃ yad rūpane ASBh-Ms.

⁽¹²⁸⁾ 本稿科段 1.1.5.1.1.2.2 参照。

附論

『阿毘達磨集論』梵本に対するチベット語訳・漢訳の異読一覧

- 1 『集論』(T [31] 633a19: 造作一切法非法我事), 『雜集論』(T [31] 695a24) ins. 一切. *abhisamskāra* om. ASVy (D 119a4, P 145b5).
- 2 *-udbhāvanatām upādāya* om. 『集論』(T [31] 633a18: 謂身具我事. 受用我事. 言說我事. 造作一切法非法我事. 彼所依止我自體事). Cf. 『雜集論』(T [31] 695a18: 謂爲顯身具我事. 受用我事. 言說我事. 造作一切法非法我事).
- 3 *-ākārātmavastūdbhāvanatām upādāyeti* om. 『雜集論』(T [31] 695a25: 於此五中).
- 4 『雜集論』(T [31] 695a26: 前四是我所事) ins. 前.
- 5 ASVy-Tib. (D 119a7, P 146a2): *de dag gi mtshan nyid de dngos po zhes bya ba'i don to*. Cf. ASBh-Tib. (D 2a5, P 2b5: *bdag gi mtshan nyid de*).
- 6 *vedītavayam* om. ASBh-Tib. (D 2a3, P 2b4), 『雜集論』(T [31] 695a27).
- 7 『雜集論』(T [31] 695a27: 受等諸蘊受用等義) ins. 蘊.
- 8 『雜集論』(T [31] 695a28: 謂識蘊是身具等所依我相事義) ins. 蘊.
- 9 『雜集論』(T [31] 695a29: 世間有情多) ins. 有情.
- 10 ASBh-Tib. (D 2a5, P 2b6: *rnam par shes pa'i phung po la*), 『雜集論』(T [31] 695b1: 於識蘊) ins. 蘊.
- 11 『集論』(T [31] 663a21: 身具等), 『雜集論』(T [31] 695b2) ins. 等.
- 12 『雜集論』(T [31] 695b3: 身者. 謂眼等六根. 具者. 謂色等六境).
- 13 ASBh-Tib. (D 2b1, P 2b8: *de 'dzin pa ni gnas dang dmigs pa'i dngos pos 'dzin to*), ASVy-Tib. (D 119b2, P 146a4: *de 'dzin pa ni rten dang dmigs pa'i dngos por 'dzin to*) ins. *'dzin to*. 『雜集論』(T [31] 695b4: 謂六根六境能持六識所依所緣故) ins. 六根六境能持六識.
- 14 『雜集論』(T [31] 695b5: 過現六識能持受用者. 不捨自相故. 當知十八以能持義故說名界).
- 15 『雜集論』(T [31] 695b9) ins. 謂如過現六行受用相爲眼等所持. 未來六行受用相以根及義爲生長門亦爾.
- 16 ASVy-Tib. (D 119b4, P 146a7: *nye bar longs sbyod pa'i mtshan nyid rnam par shes pa drug gi skye mched ni med pa'i phyir ro*) ins. *skye mched*.
- 17 *katamat* om. 『雜集論』(T [31] 695b13: 取者. 謂諸蘊中所有欲貪).
- 18 ASVy-Tib. (D 119b5, P 146a8–b1: *nye bar len pa'i rnam pa gang 'dir 'dun pa dang / 'dod chags nyid nye bar len pa ste*) ins. *'i rnam pa*.
- 19 *kena kāraṇena cchandarāga evopādānaṃ* om. ASVy-Tib. (D 119b5, P 146b1: *nye bar len pa'i rnam pa gang 'dir 'dun pa dang / 'dod chags nyid nye bar len pa ste / ma 'ongs pa la 'dod pa dang / da ltar la lhag par chags pa'i phyir ro*).
- 20 『集論』(T [31] 663a26: 希求未來染著現在欲貪名取) ins. 欲貪名取. Cf. 『雜集論』(T [31] 695b16: 何故欲貪說名爲取. 謂於未來現在諸蘊能引不捨故. 希求未來染著現在. 欲貪名取欲者希求相. 貪者染著相).
- 21 『雜集論』(T [31] 695b20: 答應如蘊說. 當知界處與取合故名有取法) ins. 界處與.
- 22 ASVy-Tib. (D 120a1, P 146b5: *gzugs rnams kyi phung po'i mtshan nyid rnams gang*) ins. *rnams*. Cf. AS-Tib. (D 45a5, P 52a1: *gzugs kyi phung po'i mtshan nyid ci zhe na*).
- 23 『集論』(T [31] 663a27: 變現相是色相), 『雜集論』(T [31] 695b22) ins. 是色相.
- 24 *rūpaṇayā* om. ASVy-Tib. (D 120a2, P 146b5: *gzugs kyi mtshan nyid rnam pa gnyis kyi tshul te*).
- 25 *katamā* om. 『雜集論』(T [31] 695b23: 觸對變壞者).
- 26 AS-Tib. (D 45a6, P 52a3): *lag pa'i 'dus te reg pas reg na gzugs su rung ba dang*. Prob. *lag pa'i 'dus reg pas reg na gzugs su rung ba dang*. ASVy-Tib. (D 120a2, P 146b6): *lag pas(D lags pas) kun du reg na reg pa gzugs te*.
- 27 *katamā* om. 『雜集論』(T [31] 695b25: 方所示現者). *-rūpaṇā* om. ASVy-Tib. (D 120a3, P 146b9: *yul dpyad pa gang*).
- 28 *-rūpaṃ* om. ASVy-Tib. (D 120a4, P 146b9: *gang yul 'di dang 'di'o*).
- 29 ASVy-Tib. (D 120a4, P 146b9): *'di nyid dang 'di lta bu*.
- 30 *saṃprayukta* om. ASVy-Tib. (D 120a4, P 148a3: *mnyam par ma bzhaḡ pa'i rtoḡ pa dang ldan pas sna tshogs su byed pa'o*).

- 31 ASVy-Tib. (D 120a3, P 146b8: *reg pas gzugs ni gzugs rnams la reg na dngos po gzhan du 'gyur bar rig par bya'o*)
ins. *gzugs rnams la reg na dngos po*.
- 32 *sparśena rūpaṇā anyathībhāvo vedītavyaḥ om.* 『雜集論』(T [31] 695b24: 蚊蛇所觸對時即便變壞。方所示現)。
33 『雜集論』(T [31] 695b27: 如此如此色者) ins. 色。
34 『雜集論』(T [31] 695b28: 如是如是色者) ins. 色。
- 35 ASVy-Tib. (D 120a5, P 147a2: *tshor ba rnams kyi mtshan nyid rnams gang*) ins. *rnams*。
36 『集論』(T [31] 663b4: 領納相是受相), 『雜集論』(T [31] 695c1) ins. 是受相。
37 『雜集論』(T [31] 695c2): 所得異熟。Cf. 『集論』(T [31] 663b5): 諸果異熟。
- 38 ASBh-Tib. (D 2b6, P 3a7: *lam mi dge ba rnams kyi 'bras bu rnam par smin pa ni sdug bsngal myong ba'o*),
ASVy-Tib. (D 120a6, P 147a4: *lam mi dge ba rnams kyi 'bras bu rnam par smin pa ni sdug bsngal rjes su myong*
ba'o), 『雜集論』(T [31] 695c3: 不清淨業受苦異熟) ins. *karmanām anubhavaḥ phalavipākaḥ*。
39 ASBh-Tib. (D 2b7, P 3a8: *gnyis ga'i 'bras bu rnam par smin pa ni sdug bsngal yang ma yin bde ba yang ma yin*
pa(bde ba yang ma yin pa om. D) myong ba ste), ASVy-Tib. (D 120a6, P 147a4: *gnyis ka'i 'bras bu rnam par*
smin pas sdug bsngal ba yang ma yin bde ba yang ma yin pa rjes su myong ba ste), 『雜集論』(T [31] 695c4: 淨
不淨業受不苦不樂異熟) ins. *karmanām anubhavaḥ*。
40 『雜集論』(T [31] 695c5: 唯此捨受是實異熟體) ins. 體。
41 ASBh-Tib. (D 3a1, P 3b1: *bde ba dang sdug bsngal de ni*) ins. *de*。 『雜集論』(T [31] 695c6: 苦樂兩受從異熟生故)
ins. 受。
- 42 ASVy-Tib. (D 120b1, P 147a6: *'du shes kyi mtshan nyid rnams gang*) ins. *rnams*。
43 『集論』(T [31] 663b6: 構了相是想相), 『雜集論』(T [31] 695c7) ins. 是想相。
44 『集論』(T [31] 663b6: 謂由想故構畫種種諸法像), 『雜集論』(T [31] 695c7: 由此想故構畫種種諸法像類) ins. 想。
45 『雜集論』(T [31] 695c8: 眼所受是見義) ins. 義。
46 『雜集論』(T [31] 695c8: 耳所受是聞義) ins. 義。
47 『雜集論』(T [31] 695c10: 如是是覺義) ins. 義。
- 48 *rnams om.* AS-Tib. (D 45b3, P 52a8: *'du byed rnams kyi mtshan nyid ci zhe na*). Cf. ASVy-Tib. (D 120b3, P
147b1: *'du byed rnam kyi mtshan kyi mtshan nyid rnams gang*)。
49 『集論』(T [31] 663b8: 造作相是行相), 『雜集論』(T [31] 695c12) ins. 是行相。 *rnams om.* AS-Tib. (D 45b3, P
52a8: *'du byed rnams kyi mtshan nyid ci zhe na*)。
50 『集論』(T [31] 663b8: 謂由行故), 『雜集論』(T [31] 695c12: 由此行故) ins. 行。
51 *nānāvasthāsu ca om.* 『集論』(T [31] 663b9: 無記品中驅役心故。識蘊何相)。Cf. 『雜集論』(T [31] 695c13): 又
於種種苦樂等位驅役心故。
52 *-duḥkha-* om. ASVy-Tib. (D 120b4, P 147b2: *gnas skabs sna tshogs rnams su ni bde ba la sogs ba'i gnas skabs*
rnams su'o)。
53 『雜集論』(T [31] 695c13): 又於種種苦樂等位驅役心故。
54 ASVy-Tib. (D 120b4, P 147b3: *rnam par shes pa rnams kyi mtshan nyid rnams gang*) ins. *rnams*。
55 『集論』(T [31] 663b9: 了別相是識相), 『雜集論』(T [31] 695c15) ins. 是識相。
56 『集論』(T [31] 663b10: 了別色聲香味觸法種種境界) ins. 種種境界。 『雜集論』(T [31] 695c15: 了別色聲香味觸
法等種種境界) ins. 等種種境界。
- 57 ASVy-Tib. (D 120b5, P 147b4): *gang* (P ins. *gi*) *mig rnams la*。
58 ASVy-Tib. (D 120b6, P 147b5): *gang gis mig rnams la*。
59 ASVy-Tib. (D 120b6, P 147b5: *gang gis mig rnams la gzugs rnam mthong ba can dang* (D ins. *f*) *blta ba ste zhes*
bya ba ni) ins. *can dang bla ba ste*。
60 ASBh-Tib. (D 3a4, P 3b5: *lta ba zhes bya ba ni da lrtar gyi rnam par shes pa nye bar spyod pa 'dzin pa nyid k'yis*
khams nyid du ston to) ins. *khams nyid du ston to*。 『雜集論』(T [31] 695c20: 現見色者。謂能持現在識受用義以
顯界性) ins. 顯界性。
61 ASBh-Tib. (D 3a4, P 3b5: *mig de'i sa bon bsags pa'i kun gzhi rnam par shes pa gang yin pa yang khams te*),
ASVy-Tib. (D 120b, P 147b6: *mig gi sa bon nye bar bsags pa kun du len ba'i rnam par shes pa gan yin yan khams*
te) ins. *yang khams te*。
62 ASBh-Tib. (D 3a4, P 3b6: *rnam par smin pa'ng khams te gang las grub zin pa'o*), ASVy-Tib. (D 121a1, P 147b7:
rnam par smin ba'ng khams te / gang las grub zin pa'o) ins. *yang khams te*。

- 63 *-lakṣaṇam* om. ASVy-Tib. (D 121a1, P 147b8: *mig gi khams ji la bar*).
- 64 *-lakṣaṇam* om. ASVy-Tib. (D 121a1, P 147b8: *yid kyi khams kyang de bzhin no*).
- 65 ASVy-Tib. (D 147b8, P 121a2): *mig gang rnam la*.
- 66 『集論』(T [31] 663b11): 謂色眼曾現見。Cf. 『雜集論』(T [31] 695c24): 答諸(明版=答謂)色眼曾現見。
- 67 ASBh-Tib. (D 3a5, P 3b7): *dbang po'i dbang gis phyi rol gyi yul 'grub pa'i phyir ro*. ASVy-Tib. (D 121a2, P 148a1): *dbang po'i dbang gis phyi rol gyi yul 'grub pa'i phyir te*.
- 68 ASBh-Tib. (D 3a5, P 3b7), ASVy-Tib. (D 121a3, P 148a2) ins. *rang gi rten dang dmigs pa'i bye brag can* (ASBh P ins. *yin*) no.
- 69 *lakṣana* om. ASVy-Tib. (D 121a3, P 148a2: *gzugs kyi khams ji lta bar sgra dang*).
- 70 *rūpa-* om. ASVy-Tib. (D 121a3, P 148a3: *rten mig gis dmigs pa gzugs kyi so sor snang ba'i rnam par shes pa ste*).
- 71 *lakṣana* om. 『雜集論』(T [31] 695c29: 如眼識界耳鼻舌身意識界相亦爾)。
- 72 *yathā cakṣurvijñānadhātulakṣaṇam* om. ASVy-Tib. (D 121a4, P 148a4: *de mig gi rnam par shes pa'i khams kyi mshan nyid do // de bzhin du rna ba dang*).
- 73 ASVy-Tib. (D 121a4, P 148a5: *de yang ji ltar rigs par khams bzhin blta bar bya'o*) ins. *khams bzhin bla bar bya'o*.
- 74 *tad dhātuvad draṣṭavyam tac ca yathāyogam* om. 『雜集論』(T [31] 696a2: 謂眼當見色。及此種子等隨義應說)。
- 75 ASBh-Tib. (D 3a6, P 3b8) ins. *bsags pa'i kun gzhi rnam par shes pa gang yin pa ste / gang las phyi ma la mig 'grub par 'gyur zhes bya ba dang sbyar ro*. Cf. Tatia 3, note 1: *upacitamālayavijñānam yata āyatyaṃ cakṣurnirvṛtiṣyata iti for ityevamādi*.
- 76 *katamat* om. 『雜集論』(T [31] 696a13: 四大種者)。
- 77 *catvāri mahābhūtāni, katham upādāyarūpaṃ* om. 『雜集論』(T [31] 696a5: 所造者。謂以四大種爲生依立持養因義)。
- 78 *catvāri mahābhūtāny upādāya* om. ASVy-Tib. (D 121a6, P 148a6: *nye bar blangs pa'i gzugs ji lta bu zhe na / skyed pa dang / rjes su 'gyur ba dang*).
- 79 ASVy-Tib. (D 121a7, P 148a7: *skyed pa dang / rjes su 'gyur ba dang / gnas par byed pa dang / gnod pa dang / 'phel bar byed pa'i rgyu yin pa'i phyir ro*)。記述順序が異なる。
- 80 *jananādīhetutvaṃ punar bhūtānām* om. 『雜集論』(T [31] 696a6: 謂以四大種爲生依立持養因義。即依五因說名爲造)。
- 81 『雜集論』(T [31] 696a6: 生因者即是起因) ins. 生因者。
- 82 ASVy-Tib. (D 121b2, P 148b2) は、先に列挙した順序 (ASVy-Tib. D 121a7, P 148a7) に従い (ii) が 2 番目ではなく 4 番目に説示される。
- 83 『雜集論』(T [31] 696a7: 依因者即是轉因) ins. 依因者。
- 84 『雜集論』(T [31] 696a8: 立因者即隨轉因) ins. 立因者。
- 85 *kyang* om. ASVy-Tib. (D 121b1, P 148a8: *rjes su 'gyur pa'i rgyu nyid ni 'byung ba rnam gyur na de la gnas pa nye bar blang sa pa'i gzugs rnam mi gnas par 'gyur pa'i phyir ro*), and ASVy-Tib. ins. *rnam mi gnas par*。
- 86 『雜集論』(T [31] 696a10: 持因者即是住因) ins. 持因者。
- 87 『雜集論』(T [31] 696a11: 養因者即是長因) ins. 養因者。
- 88 *dhātu* om. 『雜集論』(T [31] 696b13: 謂地水火風界)。Cf. 『集論』(T [31] 663b20): 謂地界水界火界風界。
- 89 *katamaḥ* om. 『雜集論』(T [31] 696a13: 地界者堅勁性)。
- 90 *katamaḥ* om. 『雜集論』(T [31] 696a13: 水界者流濕性)。
- 91 *katamaḥ* om. 『雜集論』(T [31] 696a14: 火界者溫熱性)。
- 92 *katamaḥ* om. 『雜集論』(T [31] 696a14: 風界者輕動性)。
- 93 *katamat* om. 『雜集論』(T [31] 696a15: 所造色者)。
- 94 『集論』(T [31] 663b23): 眼根耳根鼻根舌根身根。『雜集論』(T [31] 696a15): 眼等五根。
- 95 *katamat* om. 『雜集論』(T [31] 696a16: 眼根者)。
- 96 『雜集論』(T [31] 696a17: 清淨色爲體) ins. 爲體。
- 97 *katamat* om. 『雜集論』(T [31] 696a17: 耳根者)。
- 98 『雜集論』(T [31] 696a18: 清淨色爲體) ins. 爲體。

- 99 *katamat om.* 『雑集論』(T [31] 696a18: 鼻根者).
- 100 『雑集論』(T [31] 696a19: 清淨色爲體) ins. 爲體.
- 101 *katamat om.* 『雑集論』(T [31] 696a19: 舌根者).
- 102 『雑集論』(T [31] 696a20: 清淨色爲體) ins. 爲體.
- 103 *katamat om.* 『雑集論』(T [31] 696a20: 身根者).
- 104 『雑集論』(T [31] 696a21: 清淨色爲體) ins. 爲體.
- 105 *katamat om.* 『雑集論』(T [31] 696a22: 色者).
- 106 『集論』(T [31] 663c3: 此復三種. 謂妙不妙俱相違色), 『雑集論』(T [31] 696a24) ins. 三種.
- 107 ASBh-Tib. (D 3b3, P 4a6: *sngon po la sogs pa gzugs mam pa nyi shu rta lnga ni*), ASVy-Tib. (D 122a3, P 149a3) ins. *mam pa*.
- 108 「一」の表現方法には、写本、諸訳において異同が見られる。 Cf. ASBh-Tib. (D 3b4, P 4a7), ASVy-Tib. (D 122a4, P 149a5), 『雑集論』(T [31] 696a27).
- 109 『雑集論』(T [31] 696a28: 空一顯色者) ins. *ekavarman*.
- 110 ASVy-Tib. (D 122a4, P 149a5: *de las gzhan pa thogs par byed pa'i rig bya dang bral ba'i rig bya dang bral ba'i phyogs gang yin pa'i dmigs pa'o*) ins. *pa'i dmigs*. 『雑集論』(T [31] 696a29: 謂上所見青等顯色) ins. 等顯色.
- 111 *katamaś om.* 『雑集論』(T [31] 696b1: 聲者).
- 112 『集論』(T [31] 663c5): 或可意. 或不可意. 或俱相違. 或執受大種爲因. 或不執受大種爲因. 或俱大種爲因. 或世所極成. 或成所引. 或遍計所起. 或聖言所攝. 或非聖言所攝. 『雑集論』(T [31] 696b2): 若可意. 若不可意. 若俱相違. 若因受大種. 若因不受大種. 若因俱大種. 若世所共成. 若成所引. 若遍計所執. 若聖言所攝. 若非聖言所攝.
- 113 『雑集論』(T [31] 696b4: 如是十一種聲. 由五種因所建立. 謂相故) ins. 如是十一種... 由五種因.
- 114 *iti om.* ASVy-Tib. (D 122a6, P 149a8–b1: *mtshan nyid ni rna ba'i dbang po'i gzung ba'i don gang yin pa'o*).
- 115 『雑集論』(T [31] 696b8: 謂語等聲), ASVy-Tib. (D 122a7, P 149b2: *'di la ste /nag la sogs pa'i sgra'o*) ins. *ādi*.
- 116 ASBh-Tib. (D 3b6, P 4b4: *'di lta ste shing la sogs pa'i sgra'o*), ASVy-Tib. (D 122b1, P 149b2: *'di lta ste / shing la sogs pa'i sgra'o*), 『雑集論』(T [31] 696b9: 謂樹等聲) ins. *ādi*. Cf. Tatia 3, note 4: Tib. & Ch. add *ādi*.
- 117 ASBh-Tib. (D 3b7, P 4b4: *'di lta ste / lag pa dang rdza mga la sogs pa'i sgra'o*), ASVy-Tib. (D 122b1, P 149b2), 『雑集論』(T [31] 696b9: 謂手鼓等聲) ins. *ādi*. Cf. Tatia 3, note. 5: Tib. & Ch. add *ādi*.
- 118 *katamaḥ om.* 『雑集論』(T [31] 696b13: 香者).
- 119 AS-Tib. (D 46b6, P 53b7: *dri zhim ba dang / dri nga ba dang / dri mnyam pa dang / lhan cig skyes pa dang / sbyar(P sbyang) ba las byung ba dang / gyur ba las byung ba'o(P ba ba'o)*), ASVy-Tib. (D 122b3, P 149b5: *dri bzang ba'm / dri nga ba'm / dri mnyam ba'm lhan skyes las sam / sbyar ba las sam / gyur ba las so*), 『集論』(T [31] 663c9: 謂好香惡香平等香俱生香和合香變異香), 『雑集論』(T [31] 696b14) ins. *samagandha*.
- 120 『雑集論』(T [31] 696b14: 當知此香三因建立. 謂相故損益故差別故) ins. 當知此... 三因.
- 121 ASBh-Tib. (D 4a1, P 4b6: *dri ni rang gi mtshan nyid dang*) ins. *sva*. Cf. ASVy-Tib. (D 122b3, P 149b5): *dri ni mtshan nyid dang*, 『雑集論』(T [31] 696b14): 謂相故.
- 122 ASBh-Tib. (D 4a1, P 4b6: *dri ni rang gi mtshan nyid dang / phan knod dang gnas skabs kyi sgo nas rab du dbye bas nam par gzhaq go*) では *prabhedatas* を他と並列した概念と理解しない。
- 123 *tatra om.* ASVy-Tib. (D 122b3, P 149b7: *lhan skyes kyi dri ni*), 『雑集論』(T [31] 696b19: 俱生香者).
- 124 ASBh-Tib. (D 4a2, P 4b7: *de la lhan cig skyes pa'i dri ni / tsan dan la sogs pa'i dri'o // sbyar ba las byung ba ni bdug spos sbyar ba la sogs pa'i dri'o gyur pa las byung ba'i dri ni shing tog smin pa la sogs pa'i dri'o*), 『雑集論』(T [31] 696b19: 俱生香者. 旃彈那等. 和合香者. 謂和香等. 變異香者. 謂熟果等) ins. *gandha*.
- 125 *ādi om.* ASVy-Tib. (D 122b3, P 149b6: *sbyar ba ni bdug spos sbyar ba mams kyi'o*).
- 126 *katamaḥ om.* 『雑集論』(T [31] 696b17: 味者).
- 127 *katamaḥ om.* 『雑集論』(T [31] 696b20: 所觸一分者).
- 128 『集論』(T [31] 663c14): 滑性澁性輕性重性軟性, 『雑集論』(T [31] 696b20): 滑澁輕重軟.
- 129 『雑集論』(T [31] 696b22: 此所觸一分由八因建立. 謂相故摩故稱故觸故執故雜故界不平等故界平等故) ins. 由八因... 相故.
- 130 *veditavyam om.* 『雑集論』(T [31] 696b24: 界平等故息力勇. 勇者無畏).
- 131 『雑集論』(T [31] 696b25: 由二種界不平等故有飢等餘觸) ins. 触.
- 132 *katamat om.* 『雑集論』(T [31] 696b27: 法處所攝色者). ASVy-Tib. (D 123a2, P 150a5): *chos kyi skye mched kyi rang bzhin gang*.

- 133 『集論』(T [31] 663c15): 有五種應知. 『雜集論』(T [31] 696b27): 略有五種.
 134 *yathoktam* om. ASBh-Tib. (D 4a4, P 5a3: *mngon par skabs yod pa ni de nyid de // de las gzhan pa thogs par byed pa'i reg bya dang bra ba'o*), ASVy-Tib. (D 123a3, P 150a6: *mngon par gsal ba can ni de nyid de las gzhan pa thogs par byed pa'i reg bya dang bral ba'o*), 『雜集論』(T [31] 696b29): 極迥色者. 謂即此離餘礙觸色).

略号および参考文献一覧

Ch.	Chinese translation
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
em.	emended
Hayashima	早島本 (『梵藏漢対校 E-text 『大乘阿毘達磨集論』・『大乘阿毘達磨雜集論』]), See AS.
ins.	insert(s)
Ms	Manuscript
om.	omitted in
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
Pradhan	プラダン本 (一部還梵), See AS.
T	大正新脩大藏經
Tatia	タティア本, See ASBh.
Tib.	Tibetan translation

一次資料

梵文およびチベット語訳

AA	* <i>Abhidharmāvatāra</i> . Tib. D (4098), P (5599).
AK	<i>Abhidharmakośa</i> . See AKBh.
AKBh	<i>Abhidharmakośa-bhāṣya</i> . ed. by P. Pradhan, <i>Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu</i> , Tibetan Sanskrit Works Series 8, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
AKTA	* <i>Abhidharmakośaṭīkā-tattvārtha</i> . Tib. D (4421), P (5875).
AKVy	<i>Abhidharmakośa-vyākhyā</i> . ed. by U. Wogihara, <i>Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra</i> , Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1989. Reprint (First edition: Tokyo: The Publishing Association of the <i>Abhidharma-kośa-vyākhyā</i> , 1932–1936).
AS(-Ms)	<i>Abhidharmasamuccaya</i> . ed. by V. V. Gokhale, “Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga,” <i>Journal of the Royal Asiatic Society, Bombay Branch, New Series</i> 23 (1947), pp. 13–38. 早島 理 『梵藏漢対校 E-text 『大乘阿毘達磨集論』・『大乘阿毘達磨雜集論』』 3 卷, 滋賀: 瑜伽行思想研究会 (http://www.shiga-med.ac.jp/public/yugagy/AS.html), 2003. Cf. ed. by P. Pradhan, <i>Abhidharma Samuccaya of Asaṅga</i> , Visva-Bharati Studies 12, Santiniketan: Visva-Bharati, 1950. (For the Sanskrit manuscript, see Li [2013] [2014] [2015], Li & Kano [2014].)
ASBh(-Ms)	<i>Abhidharmasamuccaya-bhāṣya</i> . ed. by N. Tatia, <i>Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam</i> , Tibetan Sanskrit Works Series 17, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1976. See also AS (早島). (For the Sanskrit manuscript, see Li [2015], 佐久間 [1996].)
ASVy(-Ms)	<i>Abhidharmasamuccaya-vyākhyā</i> . Tib. D (4054), P (5555). See also AS (早島). (For the Sanskrit manuscript, see Li [2015], Li & Kano [2014].)

- PSk *Pañcaskandhaka*. ed. by Li Xuezhū and Ernst Steinkellner, *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*; with a contribution by Toru Tomabechei, Beijing: China Tibetology publishing house; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2008.
- PSkV *Pañcaskandhaka-vibhāṣā*. ed. by Jowita Kramer, *Stīramati's Pañcaskandhakavibhāṣā*, Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Science Press, 2013.
- PVk *Pañcavastuka*. ed. by J. Imanishi, *Das Pañcavastukam und die Pañcavastukavibhāṣā*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1969.
- SN *Samyutta-nikāya*. ed. M. L. Feer, The Pāli Text Society, 5 vols., 1884–1898.
- YBh *Yogācārabhūmi*. ed. by V. Bhattacharya, *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga: the Sanskrit text compared with the Tibetan version*, part 1, Calcutta: The University of Calcutta, 1957.
- PañcBh *Pañcaviññānakāyaṣaṃprayuktā bhūmiḥ*. See YBh.
- ManoBh *Manobhūmi*. See YBh.
- SavitBh *Savitarkasavicārādibhūmi*. See YBh.
- ŚrutBh *Śrutamayī bhūmiḥ*. Tib. D (4035), P (5536).
- ŚrBh1,2 *Śrāvākabhūmi*. 1=声聞地研究会『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処—サンスクリット語テキストと和訳—』大正大学総合佛教研究所研究叢書 第4巻, 東京: 山喜房佛書林, 1998. 2=声聞地研究会『瑜伽論 声聞地 第二瑜伽処 付 非三摩咽多地・聞所成地・思所成地—サンスクリット語テキストと和訳—』大正大学総合佛教研究所研究叢書 第18巻, 東京: 山喜房佛書林, 2007.
- VinSg *Viniścayasamgrahaṇī*. Tib. D (4038), P (5539).

漢訳および中国撰述文献

- | | |
|--------|---|
| 『雑阿含』 | 『雑阿含経』 求那跋陀羅訳. T [2] (99). |
| 『法蘊足論』 | 『阿毘達磨法蘊足論』 尊者大目乾連造, 玄奘訳. T [26] (1537). |
| 『品類足論』 | 『阿毘達磨品類足論』 尊者世友造, 玄奘訳. T [26] (1542). |
| 『発智論』 | 『阿毘達磨发智論』 迦多衍尼子造, 玄奘訳. T [26] (1544). |
| 『婆沙論』 | 『阿毘達磨大毘婆沙論』 五百大阿羅漢等造, 玄奘訳. T [27] (1545). |
| 『雑心論』 | 『雑阿毘曇心論』 尊者法救造, 僧伽跋摩等訳. T [28] (1552). |
| 『順正理論』 | 『阿毘達磨順正理論』 尊者衆賢造, 玄奘訳. T [29] (1562). |
| 『瑜伽論』 | 『瑜伽師地論』 弥勒菩薩説, 玄奘訳. T [30] (1579). |
| 『顯揚論』 | 『顯揚聖教論』 無着菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1603). |
| 『集論』 | 『大乘阿毘達磨集論』 無着菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1605). |
| 『雑集論』 | 『大乘阿毘達磨雑集論』 安慧菩薩糝, 玄奘訳. T [31] (1606). |
| 『義林章』 | 『大乘法苑義林章』 基撰. T [45] (1861). |

二次資料

Li, Xuezhū 李学竹

- [2013] “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* —Folios 1, 15, 18, 23, 24—,” *Annual Report The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* Vol. XVI, pp. 241–253.
- [2014] “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* —Folios 29, 33, 39, 43, 44—,” *Annual Report The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* Vol. XVII, pp. 195–205.
- [2015] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā* —Folios 2v4–8v4—,” *Annual Report The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* Vol. XVIII, pp. 275–283.

Li, Xuezhū 李学竹 & Kano, Kazuo 加納和雄

- [2014] “Restoration of Sanskrit text in missing leaves (fols. 2, 6, 7) of the *Abhidharmasamuccaya* manuscript on the basis of the *Abhidharmasamuccayavyākhyā* manuscript,” *China Tibetology* 23, pp. 53–63.
- 榎本 文雄 他
[2014] 『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語 一仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— パウツダコーシャ III』インド学仏教学叢書 17, 山喜房佛書林, 東京.
- 小谷 信千代・本庄 良文
[2007] 『俱舎論の原典研究 随眠品』大蔵出版, 東京.
- 加藤 利生
[1995] 「唯識学派に於ける法処所撰色の取り扱いかい」『印度学仏教学研究』43-2, pp. 174–177.
[1996] 「『瑜伽師地論』に見られる法処所撰色の取り扱いかい」『印度学仏教学研究』44-2, pp. 24–28.
- 斎藤 明 他
[2011] 『『俱舎論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集 一仏教用語の用例集 (パウツダコーシャ) および現代基準訳語集 1—』インド学仏教学叢書 14, 山喜房佛書林, 東京.
[2014] 『『瑜伽行派の五位百法 一仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— パウツダコーシャ II』』インド学仏教学叢書 16, 山喜房佛書林, 東京.
- 佐久間 秀範
[1996] 『タティア校訂版『阿毘達磨雜集論』梵語索引およびコリゲンダ』山喜房佛書林, 東京.
- 櫻部 建
[1969] 『俱舎論の研究 界・根品』法蔵館, 京都.
- 車 承厚
[1995] 「『瑜伽行派における法処所撰色について』」『印度学仏教学研究』43-2, pp. 136–138.
- ツルティム・ケサン (白館戒雲)
[2002] 「チベットにおける『アビダルマ集論』の研究 —バン・ロツァーフの『註釈』を中心にして—」『櫻部建博士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』平楽寺書店, 京都, pp. 401–414
- 浪花 宣明
[2008] 『パーリ・アビダマ思想の研究 無我論の構築』平楽寺書店, 京都.
- 本庄 良文
[2014] 『俱舎論註ウバーイカーの研究』(上・下) 大蔵出版, 東京.
- 福原 亮蔵 他
[1973] 『梵本藏漢英和訳合璧 阿毘達磨俱舎論本頌の研究 一界品・根品・世界品一』永田文昌堂, 京都.
- 松島 央龍
[2007] 「世親・衆賢の色 (rūpa) 解釈」『印度哲学仏教学』22, pp. 65–77.
- 山口 益
[1959] 「世親の釈軌論について —かりそめな解題というほどのもの—」『日本仏教学会年報』25, pp. 35–68.
- 吉元 信行
[1978] 「阿毘達磨集論における蘊界処建立の特質」『印度学仏教学研究』27-1, pp. 214–220.

Annotated Japanese Translation of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya* (1)

Summary

Asaṅga's *Abhidharmasamuccaya* consists of two parts: the *maula* ("main") part and the *vinīscaya* ("conclusive") part. The *maula* part has four subdivisions: *tridharma*, *saṃgraha*, *yoga*, and *samanvāgama* chapters. The *tridharma* chapter is further divided into nine sections: those of *kati*, *kasmāt*, *upādāna*, *lakṣaṇa*, *vyavasthiti*, *krama*, *artha*, *aupamya*, and *bheda*. The present paper translates text portion from the opening *uddāna* up to the section of *rūpaskandha-vyavasthiti*. The translation was done by Abhidharmasamuccaya Study Group; Yoshihiko Nasu prepared a working translation and annotations and all members read the text together and revised the translation. Li Xuezhong and Kazuo Kano worked on Sanskrit texts including newly available Sanskrit materials.

- Leader: Yoshihiko Nasu (Social Welfare Corporation Kongojushinkai)
 Members: Kazuo Kano (Koyasan University)
 Li Xuezhong (China Tibetology Research Center)
 Akira Yoshida (Ryukoku University)
 Shun'ei Matsushita (Otani University)
 Satoshi Hayashima (Ryukoku University)
 Yuki Takatsukasa (Kyoto University)
 Mitsuru Kenchu (Ryukoku University)
 Takanori Fukita (Bukkyo University)
 Hironori Tanaka (Bukkyo University)

(Synopsis)

*Piṇḍoddāna*1 *Maula* part

- 1.1 Three dharmas (i.e. *skandhas*, *dhātus*, *āyatanas*)
 - 1.1.1 Subdivisions of the three dharmas (*kati*)
 - 1.1.2 The reason for the subdivision (*kasmāt*)
 - 1.1.3 The reason why the three dharmas are called *upādānaskandhas* or *sopādāna-dharmas* (*upādāna*)
 - 1.1.4 Characteristics of the three dharmas (*lakṣaṇa*)
 - 1.1.4.1 Characteristics of the five *skandhas*
 - 1.1.4.2 Characteristics of the eighteen *dhātus*
 - 1.1.4.3 Characteristics of the twelve *āyatanas*
 - 1.1.5 Establishment of the three dharmas (*vyavasthiti*)
 - 1.1.5.1 Establishment of the five *skandhas*
 - 1.1.5.1.1 Establishment of the *rūpaskandha*
 - 1.1.5.1.1.1 Four *mahābhūtas*
 - 1.1.5.1.1.2 *Upādāyarūpas*
 - 1.1.5.1.1.2.1 Five sense faculties
 - 1.1.5.1.1.2.2 Visual object
 - 1.1.5.1.1.2.3 Auditory object
 - 1.1.5.1.1.2.4 Olfactory object
 - 1.1.5.1.1.2.5 Gustatory object
 - 1.1.5.1.1.2.6 Tangible object

1.1.5.1.1.2.7 Matter included in the sphere of mental object (*dharmāyataniḥ rūpaṃ*)

キーワード *Abhidharmasamuccaya*, 『阿毘達磨集論』, 『阿毘達磨雜集論』, 無着, 安慧